

社会構造分析の方法

— 室蘭調査を中心に —

鎌田とし子, 鎌田 哲宏

近年社会調査は、労力と時間を要するので若手研究者に嫌われるようになった。しかし理論研究の結果えられた仮説は、そこにある社会の現実を説明できるかどうか試される必要がある。社会学が科学であろうとする限り、研究の出発点で立てられた仮説の検証が求められる。この理論研究と実証研究の応答によって、理論は精緻化され前進する。

われわれは日本社会の構造を階級関係を基軸にして把握したいと考えた。戦前日本の階級関係は地主・小作関係と、資本・賃労働関係という二様の関係で成り立っていたが、戦後は前者が取り払われ、特に今日の段階では国家の機構と機能を資本蓄積に動員する独占資本と賃金労働者の関係となった。この関係を基軸としつつ、階級内部には利害を異にするいくつかの階層が存在する。これを副次的な階級関係と見て、各階層ごとに異なる生産の場と生活の場での格差構造と、差異を生む社会的な論理を明らかにしようとした。その一つとして浮かび上がったのは、二重構造の底辺階層で形成された多様な「賃金持ち寄り型家族」の存在であった。

実証は日本社会の二重構造を明確にあらわす工業都市室蘭で1964年から40年間を費やして行われた。どのようにして調査対象にアプローチ出来たのか、その後の困難を極めた実態調査のノウハウとその全容を紹介し、あわせて資料処理に当たった「技術革新」の歴史をも記録にとどめておきたい。

鎌田とし子です。はじめに経歴を申し上げます。専任で勤務したのは3カ所、北海道立保育専門学院に9年、東京女子大学によばれて30年、68歳で定年退職したあと、関東学院大学で博士課程立ち上げ要員として3年（うち1年は兼任）、完成後2度目の定年で退職して、現在町田にあるアルファ福祉専門学校で校長職を務めて5年になります。

この間、担当した主たる講義科目でいうな



鎌田とし子 氏

らば、「労働社会学」から始まり「家族社会学」そして「福祉社会学」へと比重を移してきました。理由は学生の要望に応えるためで、卒業論文のテーマが変化していくのに対応して来たのですが、期せずして社会の変動を映し出す結果になっています。いまの大学はどこでも専門に固執しているわけにはいかず何科目か担当させられる現実がありますが、理由は2つあると思います。1つは教員の「多能工化」による経費節減、1つは社会の変化が激しく、課題の広がりに応じて担当領域のウイングを拡げていかざるを得ないという理由です。私の場合は大学側からの要請ではなく、学生の興味関心の変化に寄り添っただけですが、結果として半世紀に近い教員生活が送れたのではないかと考えています。

しかしこの3つの領域は、いずれも「日本社会の階級・階層」の究明というライフワークに収斂される大テーマの部分を構成するものでもあったのです。労働者の家族を単位とする生活研究、貧困が生み出される社会のメカニズムの究明と、無駄な研究は何一つありませんでした。

とはいっても「福祉」の領域へは初めて踏み込むので、福祉の本場スウェーデンは観ておかなければと思いつち、夫と共に1988年に1ヶ月、90年にストックホルム大学・スウェーデン社会研究所に客員研究員として1年、それ以後も何回か訪れています。ソ連崩壊というマルクス主義社会学に立脚する社会学者が決定的な打撃を受けずにすんだのは、すでに「社会民主主義社会」の研究へと軸足を移していたおかげでした。

70歳の時これまでの業績を「貧困研究の方法」としてまとめ、「社会福祉学博士」を取得できたのは、福祉の分野で何か奉仕せよとの天命と受け取り、現職を続けているわけです。

いまの若い人たちは調査をやらなくなったときいており、非常に寂しく思っております。このような研究会があるというので意

気を感じて、今日はやってまいりました。私たちがやってきたことはすべてお話しますので何でも聞いて下さい。

静岡大学の鎌田です。

出身地は小樽です。北海道大学のドクターを出て、当時の北海道栄養短期大学の幼児教育科ができたときに専任講師として行きました。現在の北海道文教大学です。そこに1年5ヶ月いて、その後、静岡大学に呼ばれて行きて35年と7ヶ月いました。この3月に定年を迎えますが、定年後に札幌に戻るとしたら、北海道文教大学へ来てくれということで、1年5ヶ月いたことが縁で、また行くことになりました。口の悪い同僚の中には1年5ヶ月しかいなかったからよかったのではという人もいます。そのようなわけで4月から北海道に戻って来ますので、北海道社会学会にも入りたいと思っています。一員となりますのでよろしくお願いいたします。

1. 研究テーマ：日本社会の構造分析

1.1 理論仮説の重要性

「社会構造分析の方法」とタイトルを大きく打ち出しているのは、どうも現在行われている社会調査が、どうして社会的な現実のベタ焼きに終わってしまうのか、実態のあるがままの把握それ自体は、社会学の大変有力な武器なのですが、その結果理論の発展にどう寄



鎌田 哲宏 氏

与するかということになるとどうもはっきりしない。そのために結局は、結論が出ないから後に譲るとか、紙数を越えたのでかと言って逃げてしまうのです。なぜこのようなことになるのかずっと考えてきました。それはやはり、仮説を立てた上でそれを実証するという形をとらないからではないか。

とにかく手当たりしだいに事実を掴み取ってくるという、そのこと自体は意義のあることでもあるのです。誰も捉えたことのない事実を、這いずり回って写真のように写し撮ってくるということ。これは何もやらないで屁理屈をこねているよりどんなにか生産的だといえます。というのは、その社会のその時代の現実がそのまま記録として残されていくわけですから、そして後世の人がそれを見たときに、あの頃、あの場所で生きた人々はこうだったと比較できるわけですから、私はその意味で、非常に有意義だと思っています。

ただ、これを研究という視点で見ると、あれもこれもと拾い集めたのはいいが、それをどう料理し理論化するのかというところで、きっと、材料があまりにも多すぎるためにお手上げになってしまうのだらうと思うのです。あまり沢山集めますと人の一生というのは限られていますから、だいたいこと切れるようになっていくのです。えらく忙しくて、わあわあ言っているうちに自分の人生が終わる、命脈尽きるということになります。

ですから私は、研究というのは初めに理論仮説をきちっと立てておいて、それを実証するという形でなければ区切りが付かないと思っています。人によっては、仮説を立てれば抜け落ちることも出てくるのではないかと心配なさる方もいますが、それは杞憂です。仮説を立てて実証してみても、現実がそれに合わなければ現実のほうが正しいのですから、初めに立てた仮説が間違っているのです。ですから、もう一度仮説を修正していけばいいわけです。現実と理論仮説との間での修正に

次ぐ修正、その結果として新たな理論が生まれてくるのだと私は認識しています。

1.2 社会構造とは何か

特に「社会構造」という言葉は非常に安易に使われていますから、仮説をきちっと立てておかないと評論家と同じものになってしまうと思うのです。ですからまずはじめに「構造」をどのようなものと認識しているか、そこを中心にお話したいと思っています。

構造というのは、差異のある社会的範疇が単に重層化しているというのではなく、異なる社会的範疇と範疇のあいだにある「関係」が重要なのです。差異があると分類されたグループとグループの間に何らかの関係がなければ構造にはならないのです。

また非常に安易に使われている「階層」という概念があります。この階層という概念も、心して使わなければいけないと私は思っているんです。というのは社会学でいう階層というのは上下の関係ですね。量的なのです。質ではなく量なのです。ですから年齢階層、あるいは所得階層だとか言いますね。あれは全部量の違いとして存在しているわけです。だからこそ恣意的にどこかで切ることができるのです。例えば1万円から2万円階層といいますが、9,999円の人はいくら下の階層になり、1円違っただけで上位の階層に分類される訳ですから、このような量的な区分というのは、分類するときの基準が恣意的になる。つまりここで切ろうと思ったら、ほしのままにそこで切ることができる、つまり基準に必然性がないわけです。

これが、社会学での階層だと私は思っています。ですから上下の序列、これは確かにあると思います。それはそれで意識調査などでは便利に使えますが、私のいう階層とは違います。私の考える階層とは構造の中の一部を占めていて、他の階層との間に必然的な関係がある。その関係性を非常に重視してい

ます。その関係によって全体の構造が組み上げられていっていると理解しているわけです。

1.3 「室蘭」を選んだ理由

そのことを前提といたしまして、何故室蘭を調査したのか、おいおい分かっていたかと思う。私が使った社会分析の道具は、「二重構造」仮説に立ったわけですね。日本経済の二重構造という戦後日本の急成長を可能にした経済のしくみは周知の事実です。それゆえに室蘭が調査対象として適していたということなのです。室蘭には基幹産業である鉄鋼業の独占企業が存在したのです。

それが現在の新日鉄、私が以前に調査したころは富士鉄といいましたが、それが存在している都市として目を付けたわけです。独占企業が鎮座しているということは、北海道においては非常に珍しいことだと思います。そうして、その下には多数の中小零細企業が生産に必要な下請けという形で存在したわけですね。そしてさらにその下には、どの企業にも所属しない日雇いや臨時雇いなどがいて、最底辺にはそれらから落ちてきた生活保護世帯が沈殿していたわけです。とにかく日本社会の縮図がそこにはあったわけです。おわかりのように仮説の下敷きになったのはマルクス『資本論』の相対的過剰人口の理論ですが、日本社会の特性を踏まえるために、山田盛太郎『日本資本主義分析』（岩波書店）の方法に多くを学びました。

初めに調査に入ったのは1960年頃からですから40数年前になるのですが、そのころ調査対象を選ぶに当たっていろいろと考えました。当時は札幌の保育専門学院にいましたから、どこでもよかったわけですが、どうせやるんだったらきちんと結果が出てくるところがいいだろうと、それで少しづつがあった石川島の播磨造船にしようか、といろいろ考えて全国を回っているのです。

その中で川崎などは有力候補でしたが、もう一つ、「地域社会」での把握を念頭においていたのです。これについては後ほどお話いたしますが、国家独占主義段階では企業内での直接的な取奪のほかに、行財政を通じる取奪がありますね。あれは独占資本が国家の機構を動員して地域＝地方自治体を単位として取奪しているわけですから、国家と地方自治体の関係をきちんと捉えたかった。どのように国家が地方自治体の財政を使って取奪しているのか。そのことによって、各階層がどういう困難にさらされているのか、また逆に利益を得ているのか。そういうことを突き止めたかったために、地域としてまとまりのあるところでないといけないわけです。そうすると、私にとって川崎市というのは大きすぎるのです。

その当時、私は一人でやっていた、その後二人でやることになったのですが、いずれにしても二人組ですよ。これは、近いところの方がいいだろうということになったのです。それで見回してみたところ、あるじゃないですか、独占企業が。ああ、これがいいと。しかも室蘭は地域的にまとまりがあるのです。

なぜ地域を重視していたかという、今言ったことと、もう一つは「労働力の調達」ということを考えたからなのです。労働力の給源がある程度まとまりを持っている方が、分かりやすかったのです。例えば、労働者というのは農漁民から吸収されていきますね。現役労働者と一緒にその給源まで丸ごと捉えたいと思っていたのです。ですから室蘭調査が一段落した段階で、すぐそばにある伊達からかなりの労働者がきていたので、伊達の各漁家が戦後どれだけの労働力をどこへ出していたのか、それを調べるために周辺農漁村にも入りました。

そのように、一つは独占大企業があって、もう一つは下請け中小零細企業と、二重構造

仮説ですから、これがなきゃいけなかった。そして、おまけに収奪の機構として国家独占主義段階に入っているわけですから、それならば、やはり地方自治体というものが必要であると考えました。そこで定めたのが室蘭だったのです。

この室蘭というのは、大変当たりました。まさにそれがきちんと出てきたのです。しかも、札幌にいたときは通うことも可能だったわけですが、東京に行ってからも偏執狂のように「室蘭、室蘭、室蘭」と通ってきました。そうすると、後ほどお話をしますが知り合いが沢山できるので、新聞にも、今年も鎌田先生たちがやってきたと載りますからね。ですから室蘭の人たちはみんな知っているわけです。「ああ、来た来た」という感じで、それで行くべきところに行っていないと、「まだ来ていないよ」と伝えるくらい、顔が知れ渡ってしまうわけです。そうすると、資料を集めるときにも有利になりました。

そのように地域の人と濃厚な関係を結びまして、スウェーデンに行っていた1年間以外は、45年間毎年行っていました。行って資料の続きや情報を得ておくということ、そしてチャンスがあればすぐに調査をお願いして、やってもらうという形でやってきました。

調査はだいたい、面接が主です。そして数をとりたいときには調査票を配布するという形をとりました。これが室蘭調査の概要です。

1.4 「社会構成体」概念の社会学的解釈

さて、いよいよ研究テーマに入っていきますが、「構造」という場合に何を出发点にしたのかといいますと、マルクスの「社会構成体」という概念がありますが、これに依拠したわけです。『経済学批判』の序言にある有名な一節がありますね。それを見ていただきますと、社会というのは「下部構造」と「上部構造」から成り立っていると書いてあります。下部構造というのは「生産力」と「生産関係」で

すね。生産力としては発展段階として「産業資本主義段階」と「独占資本主義段階」と、それに国家が応援する「国家独占資本主義段階」があるから、まずこの時期区分というのは、きちんとおさえておかなければならないだろう。生産関係というのは所有に基づく搾取関係で、まさにこれが階級関係になるわけですから、これを機軸にすえて始めるということです。

上部構造は、法律、国家、政治制度、思想体系、宗教、芸術、観念、イデオロギーなどというように書いてありますが、これは下部構造に照応して上部構造がつくられ、その下部構造の中に発生する階級間の矛盾が、逆に規定し返して上部構造をまた動かすということが、この中には書いてあります（随分簡略化していますが）。

それを学びまして、では、社会学でいうところの「社会関係」や「社会集団」というのは上部構造なのか下部構造なのかということを考えてみると、どちらにも属しているように思えるわけです。

例えば「家族」を取り上げると、家族という集団は社会学では非常に重要な研究領域なのです。その家族の重要な機能の一つとして、労働力の生産をし、日々再生産をする点ですが、これは下部構造にあたりますね。そして「家族主義的イデオロギー」がありますが、これがまさに日本の社会の構成原理となり社会を動かしていました。『日本社会の家族的構成』（岩波書店）という川島武宜氏の研究がありますけれど、この点でも家族は重要な機能を担っているわけですから、下部構造にも属し、上部構造にも頭を突っ込んでいる。そのような存在であると思うわけです。

そうしたら、浜島朗氏が『社会学』（有斐閣）の中で、社会集団・社会関係に対して「媒介項」という概念を出されたわけです。下部構造と上部構造にまたがると書かれています。例えば、家族という集団は両方にまたがって

いると、そのようなものだと書かれています。

私は本田喜代治先生のお宅に伺ったことがあるのですが、その時に「先生、これはこのような理解でよろしいのでしょうか」とお聞きしたところ、さすがあのくらいの大先生になりますと、いい加減なことは言えないものですから、「少し考えさせて下さい」ということでした。そして後日お手紙をいただいて、それには、「それでよいだろう」というご返事になっているのです。

要するに私は社会学で飯を食っている人間ですから、マルクスの「社会構成体」の概念、これを使うにしても社会学的な読み替え、解釈をしないと駄目だろうと思ったのです。その時に、役に立ったのが「媒介項」の概念です。その「媒介項」のところに社会関係だとか社会集団があるというように押さえておくと、前に進めると理解し、そして進めていったわけです。

2. 理論仮説

2.1 戦前日本の二つの階級関係

さて、これから日本について分析をするわけですが、日本社会について構造的に分析をした人、これをまずは参考にさせてもらおうと思いました。

戦前の日本の階級構造をはっきりと描き出しているのは山田盛太郎『日本資本主義分析』です。他に、平野義太郎『日本資本主義の機構』（岩波書店）ですね。この二つは、大変参考になりました。これは学部の学生のころに読んだのですが、いたく感心してしまったわけです。そうか、科学というのはこのように厳密に実証しながらやっていかなければいけないのだと、山田盛太郎の『日本資本主義分析』などは、実に多くのデータが使われています。自分の言ったこと、それを全部数字で裏付け、逐一実証してあるのです。

たとえば「半封建的」資本主義という規定ですが、何故「半ば」封建的というのか。戦

前の基本的階級関係といえば地主—小作の関係ですね。明治に入っても地主の取奪は続けられ、これを原資として日本の産業が発展していく。地主が得た小作料は「半封建的な高率小作料」だったと書いてありますが、それは資本主義が始まる前の年貢の時代ですね、その時代でも3分の2は農民の手許に残ったのに、明治維新を過ぎてからは地主という中間搾取体が、農民から小作料として3分の2を取り上げ、そこから半分の3分の1に当たる分を国家に地租として収めたのです。それでは結局、農民のところには3分の1しか残らないわけですから、これほどひどい高率小作料というのは、まさに封建時代そのものであると。結局、国家権力でもってそれを無理やり納めさせたのだから、経済的な強制ではなく「経済外的」な権力で納めさせた、だから封建的であるということなのです。だけど、一応明治維新を経て近代国家になっているわけですから、「半ば」という字をかぶせて「半封建的」という規定をしているわけです。それを今言った小作料の資料に基づきながら、全部説明していくのです。これは本当に感心してしまいました。科学というからには明快な数字に裏付けられなければいけないと、大変勉強させていただきました。平野義太郎氏のほうは政治機構などを考えるときに非常に参考になりました。

その当時には日本資本主義の規定をめぐる、どのように解釈をするべきか講座派と労農派の論争が行われていました。講座派というのは半封建的である、明治維新は過ぎたけれども封建制を引きずりながら資本の蓄積をはかっているから半封建的であると言った。それに対して労農派は、まさに「経済合理的」な理由でこうなっていると主張したものですから、両者は随分と対立し論戦していました。私は講座派のほうに軍配を挙げていたわけですが、明治維新後の日本社会は半封建的な階級関係を利用しながら蓄積をはかってきたと見

る方が、その他の社会関係を組み込んで包括的に理解するのに役立つので、私は講座派の側に立ったわけです。

ここで大切なことは戦前の日本の天皇制支配体制を支えたのは、二つの種類の階級関係だったということが、私にははっきり理解できたわけです。一つは「資本－賃労働」。その頃はもう、産業資本主義段階に入っていたわけですから産業資本が成立しているわけです。そこに雇われている労働者も存在しているわけですから、これはまさに近代的な階級関係であるということです。もう一方では「地主－小作」という古い関係が存在していた。

日本資本主義の「原始的蓄積期」がありましたが、当時は農民が8割を占めていましたから農民の取奪によって集めた資金を元手に資本主義的生産を開始し近代産業を興していくわけですから、そういう意味で二つの階級関係というのは非常によく分かったのです。

一方で地主と小作という古い関係、そこから取奪しておいて、それで産業資本家を育てて、日本の資本主義は出発していく。そのような二つの階級関係というのが、鮮やかにわかったわけです。ですから戦前に日本資本主義の構造というのはまさにこれであると、それを押さえておかないといけません。

他方で、資本家に雇われる労働者の賃金が不当に安いことを指摘しています。「インド以下の低賃金」、これは形容詞でインドよりもっと低賃金で女工が働かされていたという意味なのです。この分析の中に、「高き小作料のゆえに子女を賃労働に出し」というのがあります。高い小作料を納めるために娘を女工として出さなければならない。そして、女工は家計補充だという理由で低賃金で雇用できるということです。私はこのことにピンときたのです。ああこれだと思ったのです。これが「賃金持ち寄り型」というあの概念につながったのです。日本の資本主義を支えたのは、「小作貧農の持ち寄り型家族」だったのだというこ

となのです。

このように社会学の概念である家族を、社会構造の中に位置づけることができたのです。そうするとこの時代にあった階級関係が変わってくれば、家族もまた変わっていくことは明快です。

2.2 関係概念としての「階級・階層」

次に戦後の日本資本主義の分析に入るわけですが、それはどこが決定的に違うのかというと、農地改革によって地主－小作関係が取り払われたということです。そして近代的な資本－賃労働だけの関係になったということです。そこが一番大きなポイントになるということが、その時わかりました。

それが、レジュメの「問題意識」という中に書いてあるわけですが、戦後に地主、小作関係が取り払われたのちの日本資本主義体制を支えた家族というのはいったいなんだったのか。これが研究の出発点になります。ここに日本という特性を備えた「社会」、それから「現在」という、これは資本主義の一定の蓄積段階です。それは、戦後は国家独占資本主義体制に入っているわけですから、その体制がきちんと捉えられていなければならないというわけです。

レジュメでは「階層」の概念に対する批判、これは最初に申しましたが、量的な階層序列、そのようなものではないということを書いてあるのです。それは「関係概念」でなければならない。関係を重視すると、いま言ったような、社会学の家族という関係、その他の諸集団、これらは全部諸社会関係の概念として位置付けることができるということなのです。そのように考えますと研究すべきキポイント「階級」なのです。私の問題意識では、

では「資本家階級」と言っただけで、社会のいろいろな現象が解けるのかというと、その概念は少し大きすぎると思うのです。何故

かという「資本家階級」と「労働者階級」しかない。あとは中間層といって農民や自営業者があるだけで、マルクスの階級概念にたてば主要には資本家階級と労働階級の二大階級しかないことになるわけですから、それでは分析用具としては粗い。それで、もう少し中を細かく見ていくときに何を言うかという、それが「階層」だったわけです。その当時は「社会層」とも言いました。

ですから社会学でいう「階層」とはまるで異なったものと考えていた。「階級の下位概念」、階級概念に立ちながらももう少し細かくしたというものです。副次的階級と言った方がいいかもしれません。こうして「階層」という言葉も使うようになったので、「階級・階層」と表現したのはその意味だったのです。階級関係に貫かれた階層と階層の関係という意味なので、階層が一人歩きするようなものではない。こういうわけで、問題意識に向かって、まさに一点集中的な取り組みを始めたわけです。

2.3 家族の所得構造

さて、そうは言っても現実の社会というのは、それほど単純なものではないですから、何を指標として用いれば階級内部の階層が捉えられるかということで、その頃は随分いろいろ考えたのです。しかし、これは考えているよりも現実の社会の中で手探りしてみたほうが良いと考えたものですから、この大学の近辺の、その当時は札幌市から大分離れていて熊笹が生い茂った鉄路を、汽車に乗ってやってくると小野幌部落という純農村があったのですが、そこを調査対象地に定めたのです。それが学部4年のときですね。卒業論文の対象として選んだのがこの小野幌部落だったのです。試行錯誤の一つです。

これは悉皆調査で、百何十軒ありましたか、それを全部歩きました。そこで各農家がどのような生産上の関係を結んでいるのか全て調

べあげていきました。農村の社会層は、これもマルクスの理論の中にあるのですが、農民の中には「富農」「中農」「貧農」という三つの層があるというのです。

どのような分け方をしているのかといいますと、たとえば日本の農民はみんな家族労働力を中心にやっているけれども、家族労働力の他に雇用労働力を雇い入れているのが富農だと、日本じゃほとんどありません。ところが小野幌にはあったんです。そこに住み込みで雇われている人がいるという、たった一軒でしたがありました。マルクスに言わせると富農というのだなと思っていました。そして、中農というのは家族労働力が主で雇い入れることもするが、雇われていくこともある。ですから「家族労働力プラスマイナス雇用労働力」になるわけですね。その次に貧農というのは農地が少ないために家族労働力だけで十分やれるけれども、それだけでは家計が成り立たないので、自分たちが働きに出る。「家族労働力マイナス雇用労働力」、だから賃労働を兼業してやっとな生活する。

そのように分類していくと小野幌部落にはそれらが全部あったのです。そして一軒一軒、全部調査をしていって気が付いたことがあるのです。それは、「ゆい（結）」というのをご存知ですか？ 結ぶと書いて「ゆい」。要するに無償労働力を貸し借りすることなのです。だから田植えをするというお互いに人手を借りてきて一斉にやると、その代わり、あそこからは何人来て貰ったんだから、今度はこちらから何人をお返しするということで、現金収入のない人は非常に助かったと思います。それゆえに農村としてのまとまりも生まれてくる。これだと思ったのです。

「ゆい」も全部調べて歩いたのです。そうすると、富農、中農、貧農、これらが全部結ばれているのです。一時的に需要の高まる季節には「ゆい」で補充しているわけですから、そうするとこの2ページ目の上から2番目が

貧農です。これは家族労働よりも雇われて出ることの多い人です。その下の賃金労働者家族というのも村内にいたのです。これは日雇いで働く人もいましたが、その他にも札幌あたりへ鉄道などで通勤しているという、そういう一群もわずかででしたがいました。

この中で圧倒的に多い中農の中身に注目したといいましたが、これは無償労働力の交換、「ゆい」の発見です。これが当時の日本の農村だったのです。そこで今言ったように労働力調達の型を調べていくと、何類型かに分かれるのです。これが日本の農村の階層なのだと分かって、それを所得獲得のための類型だから「家族の所得構造」としたのです。なぜ、「家族の」と付けたかということ、家族でなければこのようなことは成立しないということなのです。賃金を持ち寄る、家計をみんなで補充しあうなどということは他人だったらやらないと思います。家族だからこそ一つに纏まって、お金を集めてくるし共同して使うということをやると。それで、これを「家族の所得構造」と名づけたわけです。

この家族の所得構造は、言うなれば生産関係上の地位の総体にあたります。というのは今言ったように家族労働のほかに「ゆい」があったり、雇用関係があったりするわけですから、それを生産関係上の地位の総体というように位置づけて、これが家族の構造を規定し、人間関係を規定し、その他に村の中で結ばれているいろいろな社会関係と集団、こうしたものと全部結びついていましたので、それを全体として把握したわけです。これが学部卒論でした。

2.4 国家権力と機構

さて、今度は現段階の資本主義の階級関係をどう捉えるかということなのです。それはまさに、資本蓄積に働く国家権力と機構に着目したのです、「国独資」の段階ですから、これは生産の場の搾取にとどまらず、国家の機

能と機構を挙げて蓄積に動員をしている段階だから、ということなのです。そこで、国家の経済政策、国家が法を制定し独占資本の蓄積を助ける、これははっきり出てきますからね。たとえば独占企業が原材料や高価な機械を輸入をするときには関税を低くするとか、貿易上調整が必要なときには関税を高くするとか、これは全て国家が決めることです。ですから政党の動き、経済四団体の動き、それが資本蓄積に果たす役割を押さえる必要があります。

こうしたことを考えると、やはり行財政の知識というものが必要なのだと分かったのです。社会学者ですから、行財政などというと、行政学や財政学の方がやっていることだと思っていたのですが、どうしても必要となると読まざるを得ない。この頃、随分その方面の本を読みました。乱読でしたね。要するに他の領域の人達の本を読むということは誰も指導してくれませんか、結局乱読になるのです。ついでに言いますと私の指導を社会学者ができるかということできないと思います。だから自分で見つけてくるしかないわけです。本屋へ行って見つけてくるのです。ずっとそんなことをやっていたから、系統的ではなくめちゃくちゃな読み方をしているのです。

だいたい一日に一冊、それがノルマなのですね。読めるのです、一日に一冊は。というのは、段々熟練してきて、皆さんも斜め読みなさるでしょう。4時間あるとだいたい、一冊は読めますが、斜め読みをしていくと大事なところで目が止まるのです。こういうのは職業人の嫌らしいところでね、ぱっと目が止まってしまうから、「ああ、ここ」だけだと。とにかく乱読したのです。その当時2人の子どもを育てていたので時間がなかったのです。

このようにして室蘭市の行財政はどうなっているのかと乗り込んでいったのですが、こ

れもとてもエネルギーが要りました。室蘭市の行政が企業のためにどのように動いたのか、議会議事録をずっと見ていく、その中で各会派の議員がどんな質問をし、どう答えているか、誰の利害を代表してどういう集団が陳情に来たのか、さらに五社会（大手5社からなる圧力団体）はじめ地元商工会と、労働組合代表、大学研究者、マスコミからなる期成会・審議会の動き、それに対して市側はどのように対応したのか、それらも全部読んでいく。

それから、財政分析というのも大変ですね。予算書・決算書、特別会計もありますね、それを毎年貫ってくるわけです。そして次々と読み込んでいく、これもしんどい作業でした。けれども、その中から分かってきたことは、やはり独占資本に対して国がやることというのは、市の行財政を通すものもあるけれども、通さないもののほうが規模が大きいということなのです。国の「直轄事業」といって地方自治体を通さないでやってしまうのです。その額の大きさといったらすごいものです。

例えば「港湾浚渫作業」というのがあります。鉄鋼業が盛んになってきますと港湾に段々と大きな船を入れるようになります。鉄鋼石の運搬船が大型化すると港の海底を掘って深くしなければならぬ、これを浚渫作業と言っているのですが、これには莫大な工事費がいるわけで、それを国の直轄事業として入れてきているのです。だから地方行財政分析をやっていたって抜け落ちる分が出てくるのです。

ならばというので、かたきを討つような目で見えていくわけですから、独占資本の富士鉄（新日鉄）の字が出てきたら釘づけになるわけです。室蘭には新日鉄の他に日本石油、日鋼、栗林、榑崎があるので、鶴の目鷹の目で行財政の分析をやっていたものです。そうしたら後に、池上淳『国家独占資本主義論』（有斐閣、1965年）に出会って、さっさと読んでい

たら苦勞することはなかったのにとおもいましたが、これはいい本でした。

2.5 二重構造仮説：資本間の副次的関係

さてここまで分かったところで、今度は資本と資本との間の副次的な階級をどう捉えるのかということです。階層という言葉も使うと言ったのですが、副次的な関係のことです。この階級内部の副次的な関係というのをどう捉えたらいいか、山田盛太郎門下には優れた研究者がいたので、『分析』に続いて戦後についての新しい説を出してくれていると思っただけで、随分さがしていたのですが、見あたりませんでした。

しかも、その人達はだいたいにして書かなくなっていました。なぜだろうと思ったら、山田先生が亡くなられる前に、「日本の資本主義の分析はやめる」とおっしゃったのだそうです。私は出席しませんでした。弟子たちが葬儀のあとに記念講演会をやって、同僚の佐久間先生は出席されたのですが、そこで「日本の資本主義の分析はもうできない」「何故ならばグローバリゼーションが進んでしまったので、一国内の資本の分析はもう不可能になった」という趣旨だったようです。私もその通りだと思います。もう世界中に資本主義の網の目は広がっているのだから、一国内部だけの分析はできないという総括はよく分かりました。

分かったのですが、私は今日本社会の分析をしようとしているのです。それをグローバリゼーションだと言って、対象を無限に拡げていったらどうなるのか。これはもう個人の手には負えないことが分かりましたので、日本の資本主義の分析をしている人の本の中で何か参考になるものはないかと、手当たり次第に読んでいます。有沢広巳、篠原三代平、長州一二といった論客は早くから「二重構造論」を打ち出していたのです。

これは日本の社会というのは陽の当たる部

分と陽の当たらない部分とで成り立っている。陽の当たる部分というのは、まさに独占企業であって、陽の当たらない部分というのは、中小零細企業・農業なんかも、陽の当たらない部分になるというわけです。これは納得がいったのです。なるほど、これを使えば上手くいくかもしれないと思いました。そして、企業間格差を中心に据えて、副次的な収奪関係を調べていこうと、独占企業と下請け中小零細企業という位置づけをすれば捉えることができる。農漁業や自営業などもあるが、当面は取り上げない。

これで分析の方法がはっきりしまして、二重構造仮説に立つ階級・階層関係の分析へと進んでいくわけです。階級関係なので資本賃労働関係から入る、まずは労働過程の分析に集中する。私は二重構造を探し当てる過程で、社会政策学会の人たちがやっていた研究を随分面白いと思って読んでいたのです。例えば、賃金格差をはじめとする、労働諸条件の格差、労働市場の分断にも言及されている。まさにここに二重構造が明確に現れているのではないかというわけです。

2.6 資本・賃労働関係が規定する労働過程

諸条件のうち労働時間をみれば長時間労働は下請け中小企業、大企業の方は、8時間労働でピタッと終わらせて帰る。それから、構内に入ってみれば分かりますが、労働環境が全然違います。大企業の方は、そのころでもかなり機械化が進んでいました。その機械やコンピュータを守るために冷房がきいた運転室が工場の中空に浮いているわけです。

そして、下請け中小零細企業の人たちはというと、じかに真っ赤な鉄板がグアーンと通り過ぎていくような、汗ダラダラの現場で働いているわけです。労働環境自体にまるっきり格差があるわけですね。そうするとここから起こってくることは、様々な労働災害です。工場の底で働いている人たちはコイルの

巻き取りに失敗すると、真っ赤な薄板がうねりながら労働者に襲い掛かるのですから、死亡事故につながるのです。こんなふうな労働災害の頻度や、その規模が全然違う。

これこそが政策学会の人たちがこれまで明らかにしてくれたことなのだ。よし、ここにある格差を使ってやればいい。まず一つは、「雇用の安定性」ということを考えた。労働者である限り、雇ってもらわなければ明日から食べていけないわけですから最も基礎になる条件です。独占体の労働者は終身雇用制が慣行としてありましたが、中小零細企業では、その企業自体が倒産するわけですし、需要の波によって雇用を調整するので絶えず失業の危機にさらされます。頻繁な解雇、雇用の安定性を重視していました。つまり「賃金格差」「労働時間」「労働環境」「企業内の福利厚生」に差異がみられるのです。

さらに生活条件にも差異があります。富士鉄（新日鉄）など大手企業には社宅がありますが、下請け中小零細の人たちはひどいところに住んでいるのです。しかも自然災害が起ると真っ先に地盤が崩れてしまうようなところに建っているのです。公害になる工場の煙も流れやすい風下に位置している。そうした地区に住んでいるのは下請けが多い。このように生活条件も全く違って来るわけです。それで、私はますますのめりこんで室蘭の町中を歩くわけです。

労働組合の組織率をみますと、大企業は100%組織しているが、下請けの方は組織をしようとする親企業から下請けの社長に圧力をかけられる。「お前のところで労働組合を結成して賃上げをさせるようであれば、仕事はやらない」と、ここまで干渉してくる。だからなかなか組織化が進まないのだと言っています。すべてに二重構造があらわれてくるのです。

そういうわけで、労働過程で出てきた格差というのは生活過程でもまた、はっきりと出

てくるわけですから、生活過程分析にも入っていきます。

「生活過程」に関しては、北海道大学の教育学部におられた籠山京先生が「生活構造論」をやっておられました。この方はもともと医学博士なので、少し生理学的な生活構造論でした。後に「家計費の構造」へと変わっていきませんが、ここで生活構造を学ばせていただきましたし、江口英一氏の「不安定階層の研究」や「貧困階層の研究」も非常に素晴らしい研究だったと思います。

こうした業績に学びつつ、またマルクスに戻っていくのですが、資本論の中に「相対的過剰人口論」というのがありますね。「現役群」と失業者・半失業者からなる「過剰人口」がある。そして後者がバッファーとして使われているので資本蓄積が可能になるといっているわけです。必要がなくなれば餓にする、景気がよくなれば潤沢な労働力の貯水池があるから汲み上げる。そういう自由自在に使える「貯水池」みたいなものがある。だから、だから上手いくのだと。

そして、「流動的」「潜在的」「停滞的」という、失業者の区分がなされて、その底に「受給貧民」、生活保護をもらうような貧民が澱のように溜まっていく。そして、その人たちが現役労働者の足を引っ張っている。現役労働者が賃上げをしようとすると、「何もお前たちを雇うことはないんだぞ」「嫌だったら辞めて行けよ」と言えるんですね。だから賃金交渉が上手くいかない、ということをやっている。この、足を引っ張る関係というのはなんだろうかと。

私は今言ったように「関係」「関係」と言って探しているわけですから、この「足を引っ張る関係」と言ったのはC.ブースで、それを読むと分かるのです。それは競争関係のことで、階層と階層の間には労働市場における競争関係があるのだと。その競争関係によって今言った過剰人口が何重にも何層にも連なっ

ているということが読み取れたわけです。

2.7 労働者の「運命」：生活過程の分析

このようなことをいろいろとやっていき、構造的な階層関係ということを読み出していったのですが、次は生活過程分析がなぜ必要だったのかについて、生活過程、これにも随分とのめりこんでやっていましたが、どうしてやったかという、これは階級・階層の格差と分断の証明がここでも出てくるであろうと思ったからです。

人の一生の中で職業を転々としますね、これが「世代内移動」です。下請けの人は転々として動いています。しょっちゅう仕事なくなるわけですから、動き回っている。そして「世代間移動」というのは親から子、子から孫へという三世代での世代間移動。こういう中にも表れてくるだろう。なぜかという、親の家族が安泰で子どもに若干の援助ができるような家では、子どもに試行錯誤を許すことができる。何も援助してやれないような階層では、試行錯誤はまずできないわけです。

これはやはり現実の中から分かったのですが、例えば農漁村から出てくる人がいますね、そこでの世代間移動を調べて、農業と漁業のどちらの方が豊かかといいますと、これは農業の方なのです。漁業というのは獲れなければおしまいですし、船がひっくり返ればそれでおしまいなわけで、非常に不安定なんですね。だから社会移動を調べていきますと漁業の方がずっと悪い条件になっているということが分かったわけです。

つまりこれは、労働者の「運命」という言葉を私は使っていたのですが、この「運命」の検証に生活過程分析が役に立ったと思っています。それから社会意識の形成というのは、どこでその社会意識が形成されてくるかといえば、労働過程でももちろん意識は形成されますね。それが中心だと思います。職場でひどい目にあっているわけですから、労働者

意識は労働過程で生まれてくるものだと思います。社会政策学会の人達はだいたい、ここに中心を置いてやっているわけなのです。しかし、「全生活過程」という24時間を通して見ていけば、工場を出て家に帰ってからでも意識は形成されるわけで、両方とも全部通して見なければいけないということで、そういう意味でも生活過程の分析は必要だったわけです。

その中でも、いろいろやってきてだんだん分かってきたことは家族の所得構造の類型が違いますと家族関係が違ってくるのです。それは当然違うでしょう。私は働く家族員の続柄によって「夫婦型」とか「父子型」とか「夫婦子型」などに分けていきましたから、家族関係が当然違ってくる。そうするとそれは生活意識に反映してくるし、政治的意識だとか投票行動にもはっきり出てくると、これも室蘭だけではなく、福井の農村でも調べたら、組織労働者が家族の中にあるような世帯では、その当時だと社会党や共産党に投票する家族員が出てくるのです。ですから、こんな

ところにも一つ、落ちているものがあつたなと思って、そのために生活意識を投票行動にまでつなげて「意識形成」を観察したわけです。

さて、次に、レジユメの最後に書いてある「生活過程に及ぼす地方自治体行財政の影響」というのは、あらかじめ、みなさんにコピーでお配りした中の31ページに「国家・地方自治体行財政を通ずる資本蓄積と政治過程」という図がありますね。この図は地域社会研究として学会で報告したときにつくったように思います。地域社会を一つの研究対象としてやっていきますと、階層別の組織だとか運動、あるいは政治闘争、そのようなものがかなりよく見えてくるのですね。それをまとめたものがこの図です。地域は組織・運動・政治闘争の学校なんて書きましたが、これはやはり室蘭地域内で、いろいろと作られていった「期成会」だとか「審議会」だとか、そのようなものを全部洗っていくのです。そして、そこでどういった人たちがリーダーシップを発揮しているか、どこへその要求をぶつけてい

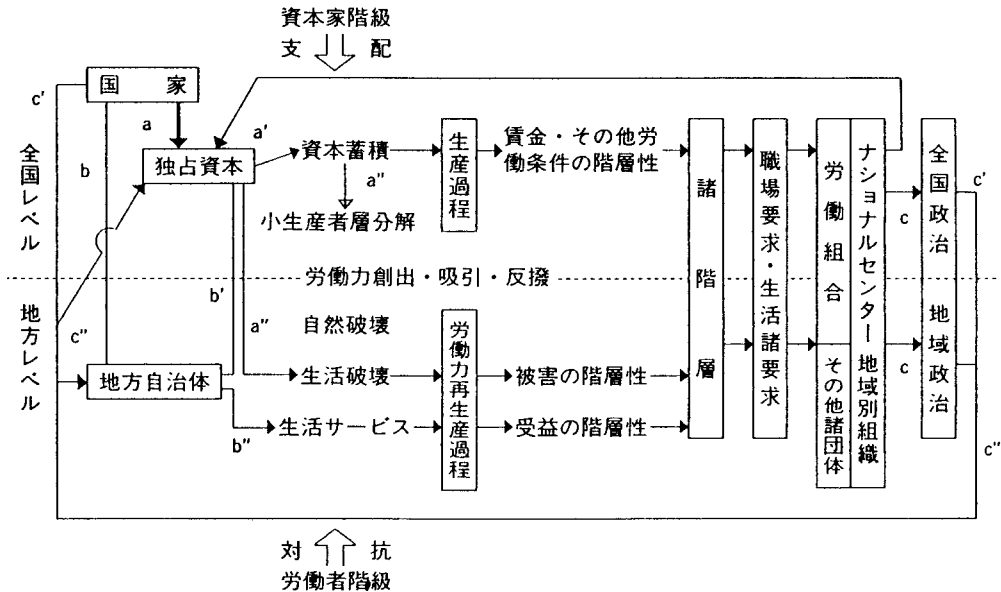


図1 (コピー31ページ) 国家・地方自治体行財政を通ずる資本蓄積と政治過程

注) ルート a は独占資本の活動, ルート b は自治体を媒介とする活動を示す。
 ルート c は選挙による対抗を示す。

て、どういう返答をもらっているのかなどを全部調べていくと、なるほど、地域社会というのには、まさに組織、運動、政治闘争の学校になるのだなど、当時、大きかったのはやはり公害反対闘争でしたね。これは随分と盛り上がっていました。何か問題が発生すると観察しやすいです。

2.8 生活条件格差の分析

結局、用いた方法というのは階級・階層的な地位から入る。対象者が、どの地位にある人かというところから入って、労働条件、生活諸条件、それから地域生活条件、これらの格差ですね。これへの分析へと進んでいったわけです。その時に（A）静態的、横断的分析と（B）歴史的、縦断的な歴史分析という二つの方法を用いてきたわけです。

まずAの静態的分析ですが、これは輪切りにして横から見えるものです。労働の場、生活の場、地域生活の場ごとにどのような階層間の格差があるのかということを見ているのです。Bは歴史的、縦断的ということですから、これは生活史を全部、繙いていくわけです。これも一人一人すべての歴史を聞くわけですね。そして労働の場ではそれが「職業移動歴」として出てくる。そして、生活の場では「家族史」の違いとして出てきます。これを比較可能な指標を用いて「生活周期発達段階」にまとめていく。そうすると生活周期の「各段階到達年齢」の違いがはっきり出てくる。崩壊を経験した場合は、段階自体の遅れや消失として、これが老後生活や次世代の生活条件の悪化として出てくるので、世代間の社会移動を規定します。地域生活の場では、階層ごとに地域政治の場における勢力関係と自治体行財政による利害関係の格差が出てくるということで、結局、国家の独占資本優遇政策が貫かれているので、それが地方行財政を支配し生活過程を支配していく、このメカニズムと諸階層の関係を調べて

いくということなのです。

2.9 戦後の賃金持ち寄り型家族

ここまでの発見ということで、一応まとめおきますと、私がやったのは、高度経済成長期の日本資本主義の分析ですね。これを支えた典型的な家族というのは、結局は二重構造の底辺部分に形成された、多様な職業の組み合わせによる、「多就労の賃金持ち寄り型家族」であったということです。戦前日本資本主義の場合は、冒頭でいいましたように「小作貧農の賃金持ち寄り型家族」が支えたのですが、この段階においては、二重構造の底辺部分で、下請けの僅少な所得を持ち寄る家族が形成されていて、それが蓄積を支えたということが分かりました。

その後の変化はまだ全部の資料をひっくり返していないので、図表としては出せないのですが、あとになるほど底辺部分とは限らず全面的に多就労家族が出てきています。一定の部分にだけ多就労というのではなくて、人口の「総労働力化」が進んできたということです。

その中で階層別に若干の傾向があるとすれば、職業の組み合わせとして、独占企業とか官公庁といった上位の階層では、労働者の働く妻が二極に分化してきている。一つは専門職化してきている。看護師や学校の教師、公務員など、かなり賃金の高い専門職に就く人が出てきている。そして他方の極ではパートで働く主婦が多数出てきているということです。

さらに、底辺階層にあたる日雇い、臨時雇いなどの人たちは総不安定職化しているのです。みんなが不安定な職業に就いて、それが組み合わせあって家計を維持している。当然、失業者もたくさん含みながらと、ということなのですが。そして、この「持ち寄り」ができる間がいい。その間は家族として成立できるわけですが、それが不可能になった家族は崩

壊現象が著しくなっていく。家族の崩壊が起こってくるラインがあるのですね。

以前は、一定の階層にだけ、例えば下請けのところからそれが出てきていたのですが、今は中小零細のほかに日雇いの人、パートの人など、不安定職に就く人が溢れ返る時代になっているわけですから、その中で家族の縮小と個人単位化がすすみその果てに崩壊がますますひどくなってきたといえます。

2.10 貧困と家族崩壊現象

次に貧困と家族崩壊現象について説明します。貧困と家族崩壊については、私はすでに室蘭に行く前にある実証をしているのです。札幌の菊水地区に昔は遊郭などがあったのをご存知ですか。底辺階層がこの地域や豊平に密集していたのです。その調査をしているのです。もう一つは豊平川に架かる豊平橋や一条橋がありますね。あの河原にスラム街があったのです。まさに堀建て小屋がね、ずっと並んでいました。

調査にどうやって入れたのかということですが、これは自分の受け持つ保育専門学院の学生、ブルーカラーの師弟が多かったものですから、「あんなものなんてことないよ。うちの父さんだって同じだよ」みたいなことを言って、それで、私はどれくらい助かったか分かりません。研究者出身階層から見るとブルーカラーの人たちは、ちょっと怖いところがあったのです。酔っ払ったりすると恐ろしいとか、殊にスラム街に入っていって何か起こったらどうするか、心配だったのですが、学生の方は「先生、ちっとも恐ろしくないよ」と言うのです。というのは、学生がすでにボランティアで行っていて、子どもの爪を切ってあげたり、顔を洗う世話をしあげたり、勉強を教えたり、「セツルメント」ですね、そういう活動をやっていたのですよ。

ですから「先生、もうそろそろ調査できるよ」なんて言ってくれて、私ものこのこと出

かけていきました。そこで、その部落の長、物を拾って歩く人、まあバタ屋です。そこにまず挨拶にいったのですが、その時にも恫喝されて恐ろしい思いはしているのですよ。そこでは蠅がとぐろを巻くようにブンブンブン飛んでいたのですが、出されたものをすぐに飲まないといつは自分たちの仲間ではないということになりますから、「ありがとうございます」と飲もうとしたら蠅がババババとついて、それがするっと一匹中に落ちていったのです。いやあ参ったなと思ったけれども、そこで驚いたら資格がないわけだから、息で蠅を横へ除けてやっとなんで「美味しかった」と言ったりもしました。そうやって入っていったのです。

それから、一軒一軒たずねて歩いて、分かってきたことは貧困が家族を崩壊させているという事実なのです。どの段階で崩壊したのか、崩壊の指標には何を使えばよいのかを、ここで勉強させてもらいました。菊水地区でも、訪問中家庭内で切ったはったの大騒ぎが起こったりしたのですが、いちいち驚いていたら始まらないので怯えないでぐっとこらえて、いろいろ聞き取って分かったのです。極度の貧困が家族を崩壊させるメカニズムが分かったのです。

本来この階層では賃金を持ち寄って初めて生活が成り立つのに、持ち寄ることができなくなると貧困に陥り、さらに下層に転落して行くと言ったのですが、その過程に階層的な条件がはたっているということを見出したのです。夫婦間に多かったのは内縁、犯罪、家出、疾病、傷病、失業、死亡、離婚、子どもがいない、行ってみるとこういう家族はすごく多いのです。それから子どもがいてもその子が障害者であったり、長期の病気をしていたり、子どもが犯罪を犯して、今は少年院に入っているだとか、家出をしただとか、15歳になるやいなや住み込みで家から出たとか。また、夫が結婚を世間一般の平均的

な年齢でしていないため、父と子の年齢がべらぼうに離れている。そうすると子どもが大きくなる前に父親は労働能力を失うので、これも貧困に陥る一つの要因になるのだと。これも、本当に一軒一軒生活史を調べていった結果、指標化できたのです。

というわけで家族生活史のどの時点でどのような理由で崩壊したのか。それから家族としての賃金持ち寄りの合計所得額と家族としての必要経費、これの比を手集計で算出していったわけです。

2.11 手集計のなかからの発見

ここで、ちょっと申し上げておきたいことは、集計と申しますけれども、データをコンピュータに入れてガラガラポンでやったのでは、本当のことは出てきません。コーディングして一定の基準に基づいて数字を入れていくわけですから、確かに何が何パーセントとパッと数字が出てきます。しかし私は、そのような集計の中から何一つ学べたことはなかったです。どこで学んだのかというと、手集計だったのです。

その手集計とはものすごく原始的なもので、こういう一枚の画用紙に対象者一軒分のことがらが全部入っているのです。家族構成から職業からすべてが入っているような集計票を作っていたのです。そして用紙の裏には罫線が沢山引いてありまして、その家についての情報が調査担当者の感想とともに全部書かれているというものです。それを使っていて、いろいろなことが分かってきたのです。

というのは、結局、頭のコンピュータに全部入れているということなのです。手集計の仕方は分かりますよね。年齢別にというと25—29歳まで、30—34歳までの人とか、何段階かに分けていきますよね。こうして出来た何グループかについて、家族構成を集計しようとしてその欄だけを見ながら繰っていくと、気がつくことがあるのです。このグルー

プではこの家族構成がやたらと多いとか、男に家族がいないとかが分かってくるのです。

そのようにして、頭のコンピュータにいつのまにか一つ一つ入ってしまうという、これが人間の素晴らしいところでパッと閃くときがある。コンピュータよりずっと素晴らしいです人間の脳は。なぜだろうというときは裏を見たり、他の項目を見たりしていると、その事象と関係する要素との因果関係とか、要素と要素の構造的な関係がそこに浮かび上がってくるのです。そのようにして集計の仕方自体が真実を探り当てるためにどんどん歩き始めるのです。

くれぐれも言うておきますが、コンピュータの中に放り込んだだけでやめないで欲しいということです。それも必要かも知れませんが、大量の集計をするときには時間もかかりますから、けれども私の経験からいうと、新しい発見は手集計の中からは出てこなかったのは確かです。だから決して資料というものをおろそかにしないで、なめ回すように読み取る労を惜しまないで下さい。きっとそこに新しい発見があるはずですよ。

2.12 生活周期到達年齢に見られる階層間の差異

そのようにして、階層別にみると各生活周期段階に到達する年齢に違いがあることがわかりました。例えば独占企業の労働者の場合、結婚する時期は25—29歳とだいたい同じなのです。妻との年齢差もだいたい3歳から5歳未満と決まっています。そうすると子どもが生まれるのはそれから1、2年ででしょう。そして、子どもの人数も2人とか3人とか決まっています。というように子育てにちょうどいいところで生んでいるのです。そしてその子が学校へ行っても、大学まで進学したとしても、学業が終わる年齢というのもみんな同じ年齢なのです。そして自分が定年を迎えるのも、大企業はまた同じです。ですから本

当に判を押したような生活周期を刻んでいくのです。

それに比べると下請け企業の労働者の中には、その周期がちょっとずれる人が出てきたり、途中で分断されてしまう人がいたり、つまり死んだとか病気になった人がポツポツ出てくるのです。それが日雇いだとか臨時雇いの階層になると、全く規則性がなくなってしまふのです。

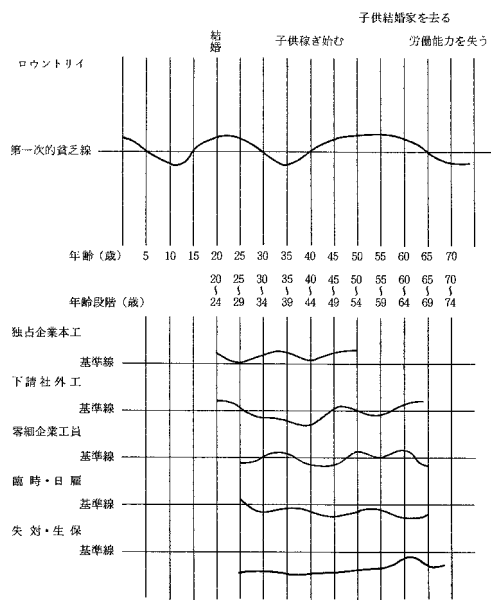
このようなことが集計の過程で段々わかってきたので、まず生活周期の到達年齢で分けてみたら、家族解体のひとつのメルクマールになると気が付いていたのです。面白いと思ったのが資料集の図3-12ですが、線が引いてあるでしょう。これをやっていたときは、細かい計算で大変でしたがすっかりのめりこんでしまいました。

図3-12の最初にあげた線は、貧困研究で有名なB.S. ロントリーが研究した、「第一次的貧乏線」からの上下図です。下には本人の

年齢が書いてあります。本人が10歳や15歳になる前は、親の家族の中において、子沢山の家庭にいてもすごく貧乏なので貧困線の下に沈んでいます。そして、親の家から出て自分が結婚するころになると稼ぎもよくなって、貧困線から上へ浮かび上がるわけです。ところが自分の子どもががつぎつぎに増えてくると、また貧乏になり、生活水準も下がってくると。そして自分の子どもが15歳になって稼ぎ始めるころになると、子どもが家にいて賃金持ち寄りをしてきますから、線上へ上がっていく。そして経済的に恵まれた一番いい時期を迎える。やがて子どもが結婚して一人、一人と家を出て行く、そうするとまた貧乏になり、本人が労働能力を失うころになると再び貧困線の下に陥ってしまうことが、ロントリーの図には書かれています。

そこで私はこれを使ってやってみようと思ひ、独占企業、下請け中小企業、零細企業、日雇いの家族について全部を調査してみたのです。そうすると大企業の本工は、どの段階でも基準線より下に落ちないのです。常にいいわけです。ところが下請け中小企業になりますと落ちる時期のほうが長く、浮かび上がってくる時期が短いのです。こういう困窮の中で家族が壊れていくことが分かったのです。だいたい、子どもが育ち盛りのときにいろいろな家族問題が起こっています。そして、臨時日雇いとなると線上には全然上がってこないのです。貧困線の下の方にばかりいて這いずり回っているのです。このようなことが分かりました。

そして、その横に図3-13とありますが、これは、三世代を続けて見るとどうなるのだろうかということで調査してみたのです。独占企業の本工をみましたら、三世代家族というのは、父や母を扶養しているわけですから、それなりに生活費もかかる。しかし基準線を下回るのはほんの短い間で、すぐ上へ上がってきていますね。この人たちは、初めは社宅



注：ロントリーの図に合せ、年齢を5歳ずつらせてある。
下請社外工の中には、臨時工が含まれている。
臨時・日雇とは、臨時工・港務荷役・建設人夫で、出稼を含まない。

図2 (資料集図3-12) 階層別夫婦家族の経済的浮沈 — 生産労働者 —

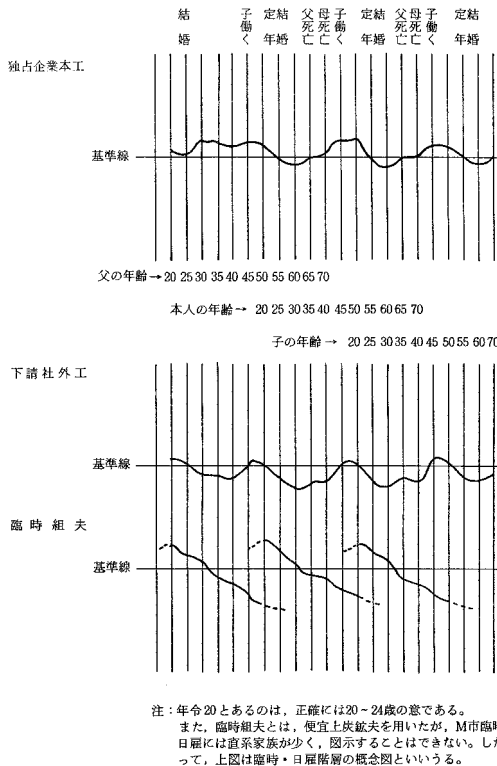


図3(資料集図3-13) 階層別直系家族の経済的浮沈の周期的律動——生産労働者

に住んで、そのうち会社が開発した団地を購入し、会社から建設資金を借りて持ち家を立て、老父母(同じ会社にいた人が多い)をそこで養って、という三世同居の裕福な家庭をこの人たちは築いているのです。

それに引き換え下請け社外工は線上に上がってくるのは短い期間だけで、下に下がってくる時期のほうがずっと長い、ですから、ここでは三世家族というのは極めて少ないのです。ではさらに下の臨時組夫の人たちはどうなのかというと、これはだいたい三世家族をつくれません。ですから一回性的に、すごく稼ぎのいい年令時には、線上に上がっていますが、年齢とともに稼ぎが少なくなると基準線より下へ落ちてしまうのです。落ちていって、かつ家族が崩壊しているのです。だから、世代ごとに一回性的な線を描く

だけなのだということが分かったのです。

こういうことは全て、手集計から発見したのです。分かったときは本当に面白かった。そのとき使ったカードは今でも残っていますが、手集計に使用したボール紙の四隅は擦り切れて丸くなっているのです。何度も使っている、手の汗がついて汚れ、臭いんですよ。それでも発見のあったこのカードは捨てられないのです。家族研究の第一人者森岡清美先生が家族研究で階層間格差を実証したのは私だと書いてくださっていますが、それが出来たのは全部手集計だったのです。ですから、資料というのは真実が隠された宝の山だと思って決して無駄にしないようにして下さい。

2.13 家族を単位とする社会移動

次に、家族を単位とする社会移動があります。社会移動といいますと何か本人だけの職業移動のように思うかもしれませんが、本人が日々暮らしている家族の条件によって、かなり影響されるということを見つけたわけです。

例えば、私たち夫婦の家族で一人が病気しようが失業しようがたちまち困ることはないし、二人とも歳をとったとしても同じくらいの給料なので年金も一人一人にちゃんとついています。これが階層の生活条件です。ところが経済的に弱い階層では、家族の中で働き手が病気をしたり失業すれば生活は途端に狂ってしまいます。家族に起こるさまざまな生活上の問題を支えるだけの力があるかどうか家族員に問われているのです。

それで、社会移動の研究の中でも注目したのは、労働市場が二重構造で隔離されているわけですから、個人の移動を見ても、世代内の移動を見ても、上から落ちてくることはあっても、下から上へ行っている人はいません。

それから、親子三世代の分析をやっていく

と、親の家族の貧困が次の世代の移動を制約しているということがよく分かります。なぜかという、そういう親の元で育った子どもは、まず低学歴でしょう。当時ですと中学校しか出ていないのです。中学校卒業で働くとなると、ほとんどが住み込みなんです。ペンキ屋だとか建設飯場ですね。ですから15歳になるや否や親のところを出ているのです。しかも労働条件が悪いので散々な目に合うわけです。体を壊したり、犯罪に走ったり、転々と職業を変えながら、さらに条件の悪い仕事に就いていく。いい職業に就こうと思っても、親類縁者の中に引いてくれるような人がいないというのもこの階層の条件です。そういうことで親の階層と同じか縮小再生産されていく。つまり、親の家族が持っていた家族的条件によって、違ってくるといことなのです。

レジュメの4ページを見てください。移動に際して働く家族的条件について見ていくと、この階層では親の家族自体が崩壊現象を起こしている。そうすると子どもは早期他出といって、義務教育も終えないでどこかへ行ってしまふ。少年院に入ったとか刑務所入りというのものもあるし、惨憺たるものです。

親の経済力がなければ、試行錯誤的な職業選択は許されないと先ほど言いましたが、大企業の方の親は、周辺の農漁村であっても、食料はじめいろいろな物を送ってきてくれるのです。子どもが送るのではなく親が援助してくれるわけです。だから、失業して新しい職業に就くまでの間しばらく試行錯誤が出来るというのは恵まれた条件です。ですから、生得的な能力の差はあるとは思いますが、親の生活条件の差が働いてくるという不公平さは、本当に感じます。

それから、労働力の供給源となる伊達の農漁村の調査をやりました。都市自営業者の調査も並行してやっています。その時に漁業より農業の方が条件はいいし、都市自営業の場合一旦出ても修業して家業を継ぐルートもあ

り、自営業から出てくる労働力の方が都市での移動は順調であるということなのです。

2.14 階級意識の形成

次に階級意識の形成とありますが、これが私にとって一番の難門でした。労働者の研究をしている方なら随分苦労されたと思いますよ。「意識」のレベルを分析しようと思うと、

そこで、私は二つの仮説を持っていたのです。それは高度経済成長であって技術革新がどんどん進んでいた時期だったものですから、技術革新が進んでいくと職務が拡大して、隣の職種の人と互いに交代しう。つまり生産過程に関して見通しがきく。工場生産の流れと経営の中身については中央制御室にいるコンピュータ技術者なら簡単に把握できる。工場を経営する能力が労働者のものになった暁には、社会の主人公になれるのではないかと思ったものです。

この仮説についてもさまざまところで調査をしているのです。鹿島住金、福山日本鋼管、御殿場工業団地の企業等々。

けれども私の見るところ、技術革新と「労働者が社会の主人公になるという意識」とは関係がないということがよく分かりました。なぜないのかというと、労働者が賢くなるでしょう。知識も豊富になる。それが全部経営側に吸い取られていく。労働者が獲得した力が資本の力として吸い取られていく、だから労務管理の手法として使われて、すぐ現場に降りてくるのです。

例えばコンピュータによって工場が全自動で回るようになれば、職務転換を簡単にやり多能工化し合理化解雇を始める。労働者の力にならないのです。

では、どこで労働者は資本家に対して刃向かえるようになるのか。マルクスの社会構成体の概念によれば変革主体が立ち現れることになっている、労働者が体制を変えるために組織を作り、運動するために立ち上がると

いっているが、どこにその芽があるのだろうか。これを知るために次に日鋼室蘭をやっているのです。

最初は富士鉄だけで十分だと思って、日鋼は見ても見ぬ振りをしていたのです。ところが室蘭をくまなく歩いていると「先生、まあ聞いてくださいよ」という話になって、あの闘いのときは、俺は第一組合で最後までやったんだとあって、自分の胸に勲章をつけているわけです。「負けたけどよ、だけど俺は絶対に第二組合には走らなかった、最後まで闘ったんだ」と言っているわけです。はあ、こういう立派な労働者もいるのだと。そして当時持っていたピラや資料がありますでしょう、それは捨てきれないと。だから全部、車庫だとか押入れに隠してあるけれども、おっ母ちゃんが「いつ処分するの」とうるさい。「だども先生、これは捨てられないべ」と言うのです。そんな話を聴いているうちに、これだと思ったのです。

やはり、この室蘭というこの地で闘われた運動が、今の若い労働者の中にどのように受け継がれていったのか。これは、はっきりさせておかなければならないということになったものですから、これには丸2年かけて資料を集め、当時闘った労働者全員に話してもらったわけですね。テープを起こして分かったことは、やはり、ああいった資本対労働という激突の場がありますね。そこでは確かに「俺たちの」という意識が生まれるし、資本家は「奴ら」ですよ、そういう対立の意識というのはちゃんと生まれるし、自分が損をしても絶対仲間を守るぞ、という、マルクスがいていた通りの階級意識がそこには形成されているのですよ。

やっぱりね、窮乏化論ですね。窮地に陥ってどうにもならないと立ち上がらない。もっと綺麗ごとでやろうと思っていた私は間違っていたのだと。綺麗ごとというのは技術革新ですね。労働者は賢くなって、自分たちの

社会に作り変えるであろうなんて、あれは綺麗ごとだと分かったのです。痛い目に合わないと労働者は立ち上がらない、これが日鋼室蘭争議の取材によって分かったのです。

3. 調査対象の選定

3.1 依頼・承諾までのルート

これから調査をする方には参考になると思いますので、入り方を紹介しておきます。

さて、3の調査対象の選定ですが、いま紹介したように室蘭中を走り回ってきたわけですが、どのようにして話をつけてきたのか、みなさん不思議に思っていると思うのです。というのは独占企業に行って「こんにちは、調査をやらせてください」と言っても、「ハイハイ」などと言ってくれるところはどこにも無いですからね。だいたい、こいつは怪しい、何者なんだ、といった目でみますから、やはり一番大変だったのはそこです。独占企業に入るとき、これが最大の山場だったんです。

保育専門学院の院長をやっていた女性がいるのですが、この院長は東京女子大学の第2回の卒業生で北海道のファーストレディ、インテリでした。この人は田中敏文という社会党知事の時代に女性として初めて福祉課長になった人です。定年になって保育専門学院の院長になっていたわけです。

当時私は熱に浮かされたように、富士鉄、富士鉄で、「どうやったら入れるんだろう」といつも言っていたらしいんですよ。「あなたには根負けしたよ、行って来なさい」「私知っている人がいるから、この紹介状を持って行って来なさい」と言われて、行ったのが室蘭の労働基準監督署、ここの所長はかつて院長が監督署にいた頃の知り合いで、そこを經由して富士鉄の管理部長のところに紹介状を持って行ったのです。勇んで出かけていったわけです。

すると、今のしょぼくれた室蘭と違って、その頃はもくもくと煙が立っていて、これこ

そ独占企業という感じだったですね。輪西の駅で降りて正門から入っていくときは深呼吸しましたよ。これから勝負だぞと。このとき、この人（鎌田哲宏先生）も一緒にやろうということになって、来ているわけです。いまから考えると立派に見えるのですが、綺麗なカーテンが下がっている応接間に通してくれて、綺麗な女の人がお茶を出してくれたりして、こんなんでもいいのかなと思ったりして、

3.2 各戸訪問調査

貫禄のある管理部長が出てこられたので話を切り出す。調査をやらせてもらいたい、しかも全従業員のランダムサンプリングをして欲しいと。調査は一軒、一軒訪ねていきたいから、住所も全て書いていただきたいとお願いしたのです。そうすると、なんでそこまで必要なのだと聞くわけです。調査票を配ってあげると言ってくさるのですが、いえ駄目ですと。保育専門学院の学生を連れてきて保育の実態を知りたいから各家庭に行かなければならない、と言ったら、そうですか、そうですよねと言うのです。それで社宅に入ることを許されたわけです。

他に勤労部長という、まさに労務管理専門の方がいるのですが、そこに話し合いに行ってくれたのです。こういう人が来て調査をしたいと言っているが資料を出してよいかと。でも、家まで行くのかということで、勤労部長は駄目だと言ったらしいのですね。しかし結局は許してくれたのです。どうしてかという、管理部長は北大卒だったらしい。そのころは私もまだ弱々しい女性でしたし、この人（鎌田哲宏先生）もさらに弱々しい大学院生だったので、むげに帰すのもかわいそうに見えたのか、いいから、全部出してあげますと言ってくれました。そして、ランダムサンプリングをしてくれたのが成功のもとでした。500人のランダムサンプリングをやってくれて、その他に、予備票分も何十票か余計

に付けてくれたのです。

保育専門学院の学生というのはたくましいですから、全部調査してきたのです。ですから合計が500を超えているのです。有り難いのは、ホワイトカラーが全部入っていたことです。労働組合経由では管理職は入っていないのです。上のほうにいくと東大、お茶大のカップル、そんなのが出てくるわけ。そして下のほうにいくとブルーカラーのカップルがザアッと出てくるのです。この名簿はありがたかったです。あれを出してもらえたから次に進めたのです。

3.3 下請け企業、臨時・日雇い労働者

そして次に、この構内には下請けというのも随分あるそうですねと言ったのです。すると、下請けと言っただけではいけない、「関連企業」があるということですねと言うのです。ああ、そういう言葉を使うのだと。それで関連企業の方もお願いできませんか、とお願いしてみたんです。すると「関連企業協議会」というのがあって、関係者を呼んでくれた。この人は構内全てを調査したいそうだから、名簿を出してあげてくれと、管理部長が声をかけてくれたらすぐに出てきたのです。ありがたかったですね。部長とはこんなに力があるものかと思って、

ところが臨時、日雇いの人になると名簿がないのです。でも、それもなくては困るので、勘を働かせて構内で働いている人のところへ、どこに行ってもいいですかと言うと、いいよというわけです。よし、これだと思って、学生に言って、埠頭で働いている港湾労働者、高炉の中のレンガを取り替える煉瓦工、それと工場改修工事にたずさわっている建設労働者を手当たり次第につかまえてインタビューした。その人たちを調査するにはどこへ行ったのかというと、岸壁や飯場です。よし、あの飯場へ突撃と、学生と一緒に行くわけです。

もちろん、学生だけでは行かせることはで

きませんから、すると布団を巻いて寄せてあるような部屋で、「こんなところで悪いけれど」というので「構いません」と。そこで、また一人ずつやるわけです。そうすると出稼ぎの人で秋田から来ているだとか、いろいろなことが出てくるわけです。こうして構内で働いている人のサンプルは全部取ったのです。

3.4 さらに対象を広げる

そうなってくると、もっと下の階層へと次々に行きたいわけです。それで生活保護世帯、これは市役所の福祉課に行く。名簿をくださいと言うと、いろいろ文句を言ってなかなか一度では出してくれません。けれど、私は正義の見方ですから（この自覚と矜持は必要）、こんなところでは負けていられないと粘るわけです。子どもが生活保護世帯の中でどう暮らしているかとか関心がありますしなんて言って粘ると、また名簿が出てくるのです。そして、「うちから出したと言わないでください」と。それを守るためには、行く世帯を広げなければならないのです。そうした貧しい人たちが住んでいる住宅がありますね。市営住宅、失業対策事業住宅へ向かって行って、今貰った名簿を取り出してもおかしくはないのです。

さらに室蘭には季節労働者がいっぱいいるのです。冬の間は仕事ができなくて失業者になって、講習を受ければ手当を出す制度があるのです。そのために市内何か所かで講習会を開きますから、何日はどこに集まると教えてくれますので、そこへ出かけていくのです。すると職員が「先生何かいいことをお話しして下さい」というので、少ししゃべらせて貰うわけです。その時に、皆さんは大企業と違って職場で大変な目にあってきたでしょう。いまもこうして手当を貰っていますが、何も小さくなることは無いのです。不安定労働者がいるから日本の産業はもっているのですからと元気づけても、労働組合幹部に話し

てありますからアウトにはならない。一応、そういう励ましをしたあとに、その場で調査用紙を配って書いてもらうのです。そして書いてあるかどうかを全部点検して、全地域の季節労働者の票は悉皆でとりました。2年くらい行ってますね。

この他に、もう一カ所行って役に立ったところがあります。それは勤医協、勤労者医療協会とって、共産党系の医師がやっているのでしょうか。本当にお金が払えないような貧困層が行っていますから、面接を求めてそこへも行きました。そして勤医協の病院の院長にお願いしますというわけです。しかし、どういう奴か分からないいうちは、なんだかんだと聞かれますが、あとは押ししかないですね。とにかく趣旨を話して押していくのです。そうするとだいたいはお手上げになるのです。姑息なことを考えている奴でもないようだし、まあ来なさいということになり紹介してくれるのです。最下層の生活困窮者の票が相当取れるのです。

あとは、「全国生活と健康を守る会」や「全日本自由労働者組合」があるのですが、ここは生活保護や失対労働者を対象に組織している組合ですね。これなんかも訪ねていくとボロクソにやられましたから。最初に行ったときは、こちらがまだ若い女性なものだから、炭労出身の威勢のいい組合長がいて、頭から「お前な」というわけですよ。「いい加減な気持ちでやるのなら調査などやらせないぞ」と怒鳴られて。これは怒っているのかな、どうするのかなど。でも引き下がるわけにいかないので、「いい加減な気持ちではない」と。そしてこっちも対抗的に言いたいことを言うわけですよ。すると、そのうちに「お前、勇気あるな」となるわけ。そして、そこでも失対労働者の名簿をどさっと貰いました。さらに失対労働者に伝達してくれたのです。この先生がどこどこで調査をするから出て来いとか、家に行ったら迎え入れてくれと。これも

役に立ちましたね。

それから店員・サービス業が第三次産業として段々と大きくなっていましたから、これを調査するのにどうしたらよいか考えました。商工会議所が発行している名簿を手に入れ、業種別に何人雇っているかが載っていますから、その中からランダムサンプリングしていきました。さらに商店街の町内会長のところへ行って、今日はこういうことで入りますと言って入れてもらうとか。ただ、調査員は女生徒でしたから、やはり私としては怖いところがあるのです。商店街といっても飲み屋さんのところ、怪しいところで、しかも夜しか開いていない店がありますからね。そこでこちら（鎌田哲宏先生）に頼んで、北大の学生を連れてきてもらいました。学生はみな男性だし、相手はみな女性なので上手くいくわけですね。そうやって店員・サービス従業者はやりました。

3.5 労組・自治体からの協力

まあそんなことで、だいたい上から下までブルーカラーはほとんど網羅したのですが、ホワイトカラーの票が足りないなと思いました。ブルーカラーばかり研究していると言いそうな人が多いので、ホワイトカラーは各企業の組合に頼み込みんでやりました。地区労だとか同盟だとか、後になると労連になりますが。

それと市役所の各課、これは必要なところは全部回りました。各企業の生産の動向、税金の徴収額は市役所でなければ分かりません。徴税課などに行くと、渋ってなかなか出さないのです。けれどそのうちに味方が出てくるのです。しょっちゅう行っているのです。あの先生、何やってんだか知らないけど、毎年毎年やってくるな。説教されたりしながら、よく回ってるよなというように、味方もできるのです。

ありがたかったのは、公害のことをずっと

追いかけていた時に、海が汚れてくると漁業の人は仕事ができなくなるので、漁業権を売り渡して日雇いになってしまう。その人たちが今どうなっているのかを知りたいので名簿を下さいと頼んだら、それはちょっと出せないのだと。なかなか出してくれないからまた粘り腰で、それがないと困ると言ったり、でも、しょうがないまた来るしかないかと思って歩き出すと、出してくれた人がいたんですよ。出口に向かって歩いていたら、周りの人に気づかれないよう私の脇の間にさっと紙を差し込んだ人がいる。きっと係りの人だと思うのです。何が欲しいということをお前は大きな声で交渉していたのですから、これだと分かったのです。外へ出てからみると全部載っているのです。何歳で漁業を辞めて、いまの職業、健康状態とか亡くなっているとか、みんな書いてありました。とても感激し嬉しかったですね。

ここに失業対策室長だった野田克也という方の名が書いてありますが、その当時失業者がものすごく増えていました。労働者が首を切られ、下請けの人たちが増えてどうにもならないので市でも独自で「失業対策室」を作ったのです。そして、全国的に雇用先や誘致企業を探しに行っていたことがあるのです。そこにも資料を求めて行きました。

こういう者ですがお話を聴かせてくださいと名刺を出すと、奥の方で「なんだ、大学の先生か、大学の先生にはろくなものはいない、帰せ、帰せ」と息巻いている人がいるのです。よっぽどひどい目にあったのかなと思って、帰されそうになったときに、取り次いでくれた人が、「今日来た先生はちょっと違うみたいだよ」と言ってくれたのです。すると「どれどれ」と奥から室長が出てきました。そして、「まあ入りなさい」ということになって、それ以来、この人がどれだけ活躍してくれたか分からないです。資料を集めるのに各課に口を利いてくれたり、いない間に統計書を集めて

送ってあげるとか。ありがたいですね、ああいう味方ができるということは。そして、今年は何を調査したいかというと、どこへ行くと話しが通じるだとか、土地の人だから人脈が張り巡らされているのです。この人には随分助けてもらいました。

ハローワークでは名簿などは出しませんから、建物の前で待ち受けているのです。失業手当を受け取りにきて出てきたところでお願いして、聴いていくようにしましたね。そういう意味では官公庁も随分使っています。それから公害反対闘争の時には道や市教委に話をつけて、学校の先生にも随分と話を聴きにいらっています。

この他労働組合も残らず行っています。組合の議案書を貰ったり、聞き取りでお世話になっていますが、あちこちで立派なリーダーに会いました（省略）。

3.6 権力構造の把握

さて、その次の権力構造なのですが、これは既存資料を全部、市議会誌とか議会会誌、議事録に目を通しました。そして市の小さい議会にも派閥があるので、各会派の事務局や議員にも出かけて行って話を聴くとか。大きな団体としては商工会議所だとか商工会などがあるでしょう。新聞社にも図書館にも通いました。

権力の中核にどんな団体があるのか、とにかく探して歩いていたら、五社会に行き当たりました。五社会って何ですかと聞くと、新日鉄と日鋼と日石、栗林、檜崎というのです。この五社の社長が集まって毎月一回、親睦と情報交換会をもっているというわけです。この五社会とが地域政治を動かすなかなかの圧力団体でした。

それから、北海道新聞というのがあるでしょう、室蘭民報などの地元紙もあります。それと業界紙のようなミニ新聞もあります。これらをとにかく探し回るわけです。そのう

ちに、共同通信のOBに出会ったのです。共同通信だから室蘭の臭いことも全部知っているわけです。その人はもう現職を退いていましたけれども、新聞屋だから退いた後も新聞の切り抜きを週刊誌にベタベタ貼って、それを屋根裏部屋へ並べて保管していたのです。これは権力構造を知るには宝の山です。いろいろ話すうち、自分自身が情報のキーマンになっていき、こういうことに関してはどうですかと自分から抜いてきてくれるのです。そこで全部写し取って、あの当時はコピー機が無いのです。しかもコピー代が高かった、一枚50円ですよ。だから大変でした。研究費が少ないもんだから、当時われわれのボーナスは研究費に化けていました。そのうちコピー機を購入して、それを車に乗せて走るようにしましたが。

3.7 信用を得ることの大切さ

これも大切なことなのですが、行った先々で資料をたくさん借りますよね。そうした時、私は必ずカードを持ち歩いて「借用証」を作り、資料の内容は何で、いつまでにお返ししますと書いて渡してくるのです。そうすると信用して貸してくれます。そして返却日にはには必ず持って行くのです。そのため、コピー機を乗っけてあるわけです。宿でどんどんコピーをして、約束した日（ほとんど翌日）にきちっと返すのです。そうすることで信用されて、また貸してくれるようになります。公害反対闘争のときに私の名詞を見て、女性の教授に公害の貴重な資料を貸してあげたら、そのまま返してこなかったと言われ、私は借りた覚えがなかったので、それは私でしたか、もっと美人ではありませんでしたかと聞くとどうだったかと言うのですよ。N.Iさんではないかと思うのですが、彼女が借りて行って返していなかったのですね。それで、私が疑われましたが、美人だったはずというと、そうだったかも知れないと。それで難は

逃れたのですが、

私は研究者が調査をするときに資料を借りたのなら、どんなことがあっても全部返却する。これを守らないと次に行った人が被害を受けます。それから日鋼室蘭争議の調査の時もそうでした。貴重な資料をみんな持って行って返さなかったそうです。それは都内の大学のある先生のことのようです。その先生が借りていったまま返さない。

〔鎌田哲宏先生：他にも沢山います。借りていったまま返さないということで、そのころ卓上コピー機が出たばかりだったのですよ。それを静岡から車で運んで。そのために私は40歳で初めて車の免許を取ったのです。当時コピー代というのは研究費では払えなかったのです。コピー代を研究費として請求しても国立大学ではだめだといわれたのです。

それで、30歳から40歳になるまで毎年、夏休みになるとコピー機を後部座席に積んで、はるばる静岡から室蘭まで行っていたのです。いろいろなものを車に積んでいるため、毎年引越しをしているようでした。高速道路などで隣の車の運転手がニヤニヤ笑っていたりして、その代わり借りてきた資料は原則として一晩で返す。ジーコジーコって、一晩中コピー機を使って、次の日に返すと驚いて、じゃあ次のものも持って行っていいよという調子でたくさん資料を貸して貰いました。車にコピー機よりもうず高く積んで帰りました。〕

やはり、信用第一なのです。信用してもらえたと何でも貸してもらえますしね。それに向こうからいろいろな情報をくれます。そうしないと次の世代の人が迷惑してしまう。この日鋼室蘭調査というの、いま言ったように、室蘭の調査のためにあちこち歩いている間に、日鋼労働者に会う機会が非常に多いわけです。それで第一組合、第二組合というの

が熾烈な闘争をやったのだということも分かってきたので、これは両方ともやらなければいけないと。

そうすると、第一組合の高橋信明さんが、私たちを一目見て「この人は信用できると思った」というのです。どこを見てそう思ったのかはわかりませんが、この人なら信用できると。それで全面的に協力してくれることになったのです。「自分たちの闘争を書き残してもらおう」と。この人なら本を出してくれると思ったそうなのです。えらく信用されたもんですね。〔『室蘭日鋼争議30年後の証言』(御茶の水書房)をまとめているとき癌が発覚し、うんうん言っていたのですが、裏切るわけに行かず出版にこぎつけた)。

そうすると、その人が第一組合員のここに全部話しを付けてあると、第二組合員もこれがキーパーソンだとか、これは寝返った人だとか教えてくれるのです。そして、それらの人全部を紹介してくれたのです。それでテープレコーダーを持って出かけて行って後で文章にしますのです。高橋信明さんという人は強力な味方でした。その地域で長年調査をやっていますと、情報が飛び交うわけです。新聞にも二人の顔がしっかりと出ているので、ああ、この人方だねと。この人たちに話しておくを書いてくれるから、室蘭の歴史が残るよと言っているわけです。それはありがたいことでしたね。

3.8 給源としての農漁村

それで最後の給源としての農漁村ですが、漁協、農協にお願いに行きまして、結局漁師の家に学生を一人ずつ泊めてもらうことにしたのです。そうすると、長時間いろいろなことが聴けるでしょう。信用もつくし。そして、戦後その家から出て行った人、労働力ですね。行った先と職業、全部について一人一人記録し集めたものがありますが、省略します。

3.9 必然性の論理は実態の中に

さて、この辺で締めくくろうと思います。

私がここで言いたかったことはただ一つです。調査というものは仮説を実証するために行うものであって、仮説も持たずただ「ありのままを把握する」のが調査だと思うから理論化できないのです。つまり「ありのままの事実」から何かを語ろうとしても、事実と事実をつなげる論理がなくては、換言すればなぜ無限に存在する諸事実の中から、他にもないこの特定の事実を拾い出したのかを語る説明が必要になると思うのです。この事実と事実をつなぐ論理、これが必然性の論理です。

事実と事実を並列的ではなく一つながりの論理として展開するためには接着剤がいります。それは論理的な必然性であり、調査のはじめに立てた理論仮説なのですが、論理的必然性は実態の中に隠れていますから、事実に当たって一つ一つ確かめていく作業が必要です。これが実態調査の意義です。つまり、仮説は事実とつき合わせることによって修正を加えられ、あるいは否定されながら、次第に真実に迫っていくものだと考えています。

私たちは、社会構造を階級・階層関係で把握しようとして苦闘してきました。完成の域にはほど遠いと思いますが、研究の方法についてその一例は提示できたのではないのでしょうか。

いまになって考えることは、人の一生なんでものはたいしたことはできません。本当に、これだけ長い時間をかけてコツコツやって、どれだけのことができるのかということなのです。たったこれっぽっちのことに、あれだけの労力をつぎ込んだのかというくらい、大変な労力です。それは私の要領が悪いということがあるのかもしれませんが、そんなにたいしたことはできないものだなあ、というのが、今の感想です。ここで選手交代です。

4. 理論仮説から検証へ

4.1 戦後日本の階級構造

私たちはコンビを組んでやってきました。私の方は引き続いて、具体的な集計だとか統計表作成の作業について「苦労話」を少しお話しして残しておきたいと思っています。今の若い人の中には昔のことを知らない人も多いと思いますので、こんなふうに苦労して調査した、あるいは集計した、そういうあたりをお話したいと思います。

そうは言っても私も勉強はしております。私の学生の頃は偉い先生は布施鉄治先生をはじめとして、二言目には「国家独占資本主義」、それを省略して「国独資」とみなさんおっしゃっていたのです。東京では島崎稔先生のお宅に呼ばれまして、研究会に毎月出席するということで、いろいろと教えていただいたのですが、「国独資」と言われ、いったい何だろうと。具体的に、社会学的に国独資を捉えなおしたら、どのようになるのだろうかということで、室蘭の調査をやりながら考えました。これについて書いたのが、布施先生、それから岩城完之先生、鎌田とし子が共編者になった『日本社会の社会学的分析』（アカデミア出版会、1982年）という本です。この本の最後の章です。

布施先生から「国家権力と官僚制政治」という題だけ与えられて、これを何とか書けといわれ、ちょうどいい機会だと思い、「国独資」というのは、具体的に見たらどういうことなのかということを書きました。室蘭の地域を見て歩いたわけですから、他の地域もありますが、そういうものを踏まえた上で国家というもの、「国独資」の支配体制はどういったものを指すのかということを勉強したものを書きました。私としてはこれが基本的な視点になっていると思いますし、ここで書いたことがもう古臭くなっているとは思いません。ますますこれが今の日本社会に当てはまってきているのではないかと、秘かに自画自賛して

おります。機会がありましたらこれを読んでいただきたいと思います。

それから、今の話の中にありましたように、「二重構造」、これも当時は流行っていました。われわれも基本的な枠組みとして、二重構造をふまえています。独占資本と中小零細企業との間の関係というの、やはり押さえなくてはならないと考えました。これについては、『法経研究』（静岡大学人文学部）に「都市自営業層の階級性格」という論文を書きました。この中に二重構造という中身、独占資本企業と中小零細企業はどのような関係にあるのかということ、まとめて書いてありますので、これもできれば読んでいただきたいです。二重構造における独占資本大企業と中小零細企業の関係を書いてあります。

4.2 階級構成表の作成

さて、そういうわけで私たちのテーマは、日本社会の社会構造ですね。これを把握するというものであります。この場合、やはりデータ的に出発点としたのが、お配りしました「階級構成表」です。このような形式を考えたのはご承知の通り、京都大学の橋本隆憲先生なのですが、その弟子に当たる方が静岡大学の社会統計学にて、その人たちが中心となって、国勢調査をはじめとして国のさまざまな調査を駆使して、いろいろな面白い統計表を作っていました。その中に階級構成表がありまして、作り方も出ていました。ところが、彼らは1975年まで、この階級構成表を作り、そこで止めてしまっていたわけですね。

私はその先が知りたくて1980年、85年、90年というように階級構成表を作りました。これがやはり、非常に面白いもので、深いところは分からないという、意義はあるけれども限界も結構多いという評価もありますが、私としては面白いと思い、これを5年ごとに作っていました。これは東京女子大学の古屋野正伍先生と山手茂先生、鎌田とし子共著の

『社会学』（学陽書房、1998年）という本がありますが、そのなかにこの階級構成表の変化をずっと追跡し掲載していたわけです。5年ごとやっているが入らなくなって、10年ごとになっています。1990年を最後にしてその後は、残念ながら作っていません。

この階級構成表は簡単なようでいて、結構難しいです。というのは、国勢調査、国の調査ですね、これが昔からずっと同じものと同じやり方で調査はしていないのです。結構、変わっているのです。ですから、変わったところをきちんとふまえて、この階級構成表をなるべく前と同じような考え方、方法で作らなければならないというのは厄介なものです。それで社会統計学の人々が1975年以降作っていないんですね。

私の室蘭研究とか階級構成のようなものは社会学の人よりは社会経済学や社会統計学の人たちが面白がってくれましてね。ついこの間も人文学部の社会統計学の先生が、私が定年でもういなくなるので、一度話をしたいと研究室まで来てくれて、このデータなどを見て非常に面白がっていました。彼に1990年以後の階級構成表を社会統計学のほうで作っているのかと聞くと、誰もやっていないと。なぜというとなかなか大変なのだと言っていました。

1990年、今度1995年は農民層の分解のところ、農林漁業者がどれだけ減ったのかということ、ここだけを調べて5.3%に減ったということを書いてはいますが、2000年の階級構成表も作らなければならない、これをいま作ろうとしております。国勢調査の小分類、職業小分類がまだでないのですね。このコンピュータの時代にまだ2000年の小分類がなくて、去年ようやく、本として出版はされていないのですがデータだけが先に発表されたばかりです。それでその職業小分類のデータをふまえて2000年まで作ろうと思っています。

どなたか若い人が2005年、2010年まで作っていただけないかなと。私はこれを眺めて一人で楽しむ立場になりたいなと思っています。ここの大学には社会情報学部があるのですから、どなたかやっていただけないかなと思っているわけでありまして。というわけでデータの的にはこの階級構成表から出発しております。

もちろんこれには限界があり、もっと突っ込んだ階級構成表でなければいけないと考えまして、こちらの集計表の表0-1【資料集】を見てください。日本の階級・階層構造、これは私たちの仮説を元にして、仮説に合う形で階級構成表を作ったものです。民間セクターⅠ・Ⅱとあります。これは下に説明がありますが「価値生産部門Ⅰ」と「不価値生産部門Ⅱ」,「国家セクターⅢ」の三つに分けて、階層として「独占資本家」と「非独占資本家」、中間階級として「小生産者層」,「労働者階級」の中の階層としてA層「独占企業労働者」、B層「非独占企業労働者」、そしてC層として「臨時日雇い労働者」、D層は「失業者」「内職者」「被生活保護者」。もちろん国家セクターでは公務労働者がいるわけですね。このような階層を決めたわけですね。これが私たちの具体的な階級、階層、社会層であって、そこにも数字をできるだけ入れておきました。単位は万人となっています。このような表を作ってさらに今度は、私たちが対象としている室蘭市の階級構成表を作らなければいけないということになります。

4.3 階級構成表と調査対象の確定

室蘭市の階級構成表は表0-7【資料集】を見てください。これはわれわれが理論仮説に則って作った室蘭市の階級構成表です。これは、さまざまな統計を駆使しまして作りしました。室蘭市にはこのような統計を専門に扱うところがありまして、市役所の外郭団体かな。そこに統計オタクのような人がおりまして、

いろいろ面白いことを調べているのですが、そのようなところからデータをいただいたりしました。室蘭市の統計のほかには商工名鑑とか、企業労働組合の聴き取り調査だとかのデータ等々を駆使しまして、このような階級構成表を作りました。これが私たちの室蘭市全体を把握する基本となるわけです。

その下の表0-8【資料集】、これが調査対象になった階層別の世帯数であります。この中身については先ほどお話ししてありますが、この中から取り出したい20分の1のサンプルの結果ということになります。こういう調査を行ったということですね。

さらに下請け中小企業、それが問題ですから表の1-13【資料集】。これは私たちが調査を行ったところの新日鉄の下請け企業の一覧です。その「労働力構成」というものであります。まあ、こういう数、こういう企業の下請けとってはいけないのですね、「協力企業」「関連企業」があった。これを踏まえてここから調査をおこなったのです。

5. 調査の実施とデータ処理の技術革新

5.1 調査票の作成

調査票を作成しましたが、残念ながら今日は調査票を持ってくることはできませんでした。私はちょうど定年なので、研究室や社会調査室の荷物を全部ダンボールに入れて最中に小内さんから話があって、半分以上はダンボールの中にしまってしまった後で、全部で170箱以上になってますからね、残念ながら持って来られませんでした。それらは、4月から勤務する北海道文教大学の空き部屋に送ってしまったのです。

これらは、われわれの仮説を実証するための調査であるということ意識しました。ですからフェースシートにかなりの重点をおいたということになります。家族構成とかそれぞれの収入とか勤め先など、そういうものです。それと社会移動の研究のためには、フェー

表1 男女別階級構成の推移

(労働力人口を100.0とした数値)

	列番	1950年			1960年			1970年			1980年			1990年		
		総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
総人口	1	229.1	182.9	302.9	212.2	171.1	276.3	197.7	159.3	257.4	204.5	161.6	275.5	194.4	157.6	250.9
14歳以下人口	2	76.1	63.0	97.1	63.8	53.4	79.8	48.7	40.8	61.0	48.2	39.7	62.2	35.4	30.0	43.7
労働年齢人口(15歳以上人口)	3	153.0	119.9	205.8	148.4	117.6	196.5	149.0	118.5	196.4	156.4	121.9	213.3	159.0	127.7	207.2
非労働力人口	4	53.0	19.9	105.8	48.4	17.6	96.5	49.0	18.6	96.4	56.1	21.7	112.8	57.8	26.4	106.1
労働力人口(完全失業者を含む)	5	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
就業人口(休業中を含む)	6	98.0	97.7	98.4	99.2	99.2	99.4	98.7	98.5	98.8	97.5	97.2	98.1	97.0	96.7	97.5
A 資本家階級	7	1.9	3.0	0.2	2.2	3.5	0.2	3.9	6.1	0.5	4.8	7.2	0.9	4.1	6.2	1.0
(1) 個人企業主	8	0.4	0.6	0.1	0.2	0.3	0.0	0.1	0.1	0.0	0.3	0.5	0.1	0.3	0.4	0.1
(2) 会社役員・管理的職員	9	1.1	1.9	0.0	1.8	2.8	0.2	3.6	5.6	0.4	4.3	6.4	0.8	3.6	5.4	0.9
(3) 管理的公務員	10	0.3	0.5	0.0	0.2	0.4	0.0	0.2	0.3	0.0	0.2	0.4	0.01	0.2	0.4	0.0
B (4) 軍人・警官	11	0.5	0.8	0.0	0.8	1.3	0.0	0.8	1.3	0.0	0.8	1.3	0.05	0.8	1.3	0.1
C (5) 自営業者層	12	58.9	50.6	72.3	45.5	37.7	57.7	34.7	27.7	45.7	27.9	23.3	35.4	19.5	17.9	22.0
(a) 農林漁従事者	13	44.6	35.8	58.5	30.4	23.3	41.4	18.1	13.5	25.3	9.9	8.0	13.0	6.2	5.5	7.4
(b) 鉱工運通従事者	14	6.3	7.3	4.5	6.2	6.9	5.1	7.3	7.2	7.6	6.8	6.9	6.5	4.5	5.6	2.8
(c) 事務従事者	15	0.2	0.2	0.1	0.2	0.1	0.4	0.7	0.1	1.3	1.4	0.7	2.7	1.4	0.6	2.8
(d) 販売従事者	16	6.2	5.8	6.9	6.3	5.5	7.6	5.5	4.4	7.1	5.8	4.8	7.5	3.7	3.2	4.5
(e) サービス従事者	17	0.9	0.5	1.5	1.6	1.0	2.6	2.3	1.3	3.7	2.6	1.6	4.3	2.1	1.4	3.2
(f) 専門的技術的職業従事者	18	0.8	0.9	0.7	0.8	0.0	0.7	1.0	1.1	0.8	1.3	1.4	1.3	1.5	1.6	1.2
(6) うち家族従事者	19	33.7	17.1	60.3	23.8	10.6	44.4	15.9	5.5	32.2	11.3	3.5	24.1	6.6	2.0	13.6
D 労働者階級	20	38.5	45.5	27.4	51.5	57.6	42.0	60.4	64.8	53.4	66.6	68.4	63.7	74.3	74.2	74.5
(7) いわゆるサラリーマン層	21	11.9	13.6	9.2	13.9	14.7	13.2	18.6	16.8	21.4	22.0	17.6	29.7	26.3	20.8	35.9
(a) 専門的技術的職業従事者	22	3.7	4.2	2.9	4.1	4.4	3.8	5.5	5.6	5.2	7.0	6.1	8.6	9.8	9.3	10.5
(b) 事務従事者	23	8.2	9.5	6.3	10.0	10.3	9.4	13.2	11.2	16.2	14.9	11.6	20.8	16.9	11.5	25.4
(8) 不生産的労働者層	24	4.5	3.8	5.7	8.5	6.8	11.0	10.9	9.5	13.0	13.2	12.2	14.7	15.8	15.3	16.6
(c) 販売従事者	25	2.0	2.5	1.2	4.4	4.8	3.8	6.4	6.8	5.7	8.4	9.1	7.21	10.3	11.4	8.5
(d) サービス職業従事者	26	2.5	1.3	4.5	4.0	2.0	7.2	4.5	2.7	7.3	4.8	3.1	7.5	5.5	3.8	8.0
(9) 生産的労働者層	27	20.0	25.8	10.8	28.2	35.2	17.2	29.5	37.0	17.8	29.1	34.6	17.9	28.8	34.9	19.5
(e) 農林漁従事者	28	2.3	2.9	1.4	1.8	2.2	1.1	0.8	1.1	0.4	0.7	0.9	0.4	0.6	0.7	0.4
(f) 鉱工運通従事者	29	17.7	22.8	9.4	26.4	33.0	16.1	28.7	35.9	17.4	28.3	34.8	17.6	28.2	34.1	19.1
(10) 完全失業者	30	2.0	2.3	1.6	0.8	0.9	0.6	1.4	1.5	1.2	2.5	2.8	2.0	3.0	3.3	2.5

(出所) 統計指標研究会『統計日本経済分析・下』新日本出版社 313頁 1978年。

ただし1980年、1990年については、鎌田哲宏が国勢調査より同様の手続きにより試算した。

表2 (資料集表 0-7) 室蘭市の階級構成表 (1965 年)

階級・階層	就業者	民間セクター				国家セクター			
		I. 生産部門				II. 不生産部門		III. 公務	
		階層	人数	割合	人数	割合	階層	人数	割合
合計	70,358人		34,887人	49.58%	27,330人	38.85%	階層	8,141人	11.57%
資本家階級	1,812 (2.57%) 837 (1.19%)	独占資本家(社)	3	0.004	88	0.13	保安サービス要員	837	1.19
		非独占資本家(社) 内{大企業主 中小企業主	430 11 419	0.61 0.02 0.60	1,291	1.83			
小生産者層	7,560 (10.75%)	農 漁 民	863	1.23					
		業 主 内{家族従業者	401 462	0.57 0.66					
		都市自営業者 業 主 内{家族従+使用人	274 186 88	0.39 0.26 0.13	6,423 2,906 3,517	9.13 4.13 5.00			
労働者階級	60,149 (85.49%)	A独占企業労働者 内{労働員 職 員	13,605 10,590 3,015	19.34 15.05 4.29			公務労働者 内{事務員 現 業	7,304 5,220 2,084	10.38 7.42 2.96
		B非独占企業労働者	17,560	24.96	19,528	27.76			
		C臨時日雇労働者 臨 時 雇 農 業 完全失業者			2,152人 517 269 1,366	3.06% 0.73 0.38 0.94			

注：I＝鉱、建設、製造、運通(鉄鋼業下請が多いため入れた。)小生産者層は、本来別掲すべきであるが、便宜上Iに表出した。

II＝卸売・小売、金融、不動産、電気・ガス、サービス

臨時日雇労働者は、I、IIいずれにも雇用される。

被救恤貧民は、世帯数で1,196、人員で3,628人であり、表出しないが分析ではD層とした。

不生産部門のA層は、支店のみであるため正確につかぬ、B層に一括した。

B層の不生産部門労働者19,528人中、販売・サービス労働者は8,555人である。

表3 (資料集表 0-8) 調査対象の階級・階層別世帯数

(単位：人)

階層	部門	合計	生産部門		不生産部門			
			I	II	III			
			人数	人数	人数			
合計		2,099	1,143	516	440			
室蘭市労働者階級	A層	388	A I W (M鉄事務員)	101	A II W (銀行・デパート事務・店員)	80	A III W (官公専・事務員)	207
		659	A I b (M鉄工具) ₁₎	426			A III b (官公務員)	233
	B層	171	B I W (下請事務員)	44	B II W (中小商社事務・セールスマン)	127		
		385	B I b (下請・零細工具) ₂₎	275	B II b (中小商社・バス会社労働者)	110		
	C層	275	C I b (臨時工・日雇) ₃₎	184	C II s (臨時事務・個人店員・サービス)	91		
D層	66	失対(失対労働者) ₄₎	66					
	47	生活保護(有家族者) ₅₎	47					
都市自営業		108		商工・サービス業主	108			

注：1) M鉄本工は、ランダムサンプリングによる票404名と、30年勤続者を有意抽出した票22名を含む。この他に独身寮での調査も実施したが、今回の分析には用いなかったため表出なかった。

2) B I bの内訳は、M鉄構内下請企業常雇186名、零細企業常雇89名(内重工業68名、軽工業21名)である。

3) C I bの内訳は、M鉄構内下請企業臨時工59名、港湾荷役39名、建設人夫34名、出稼労働者52名である。

4) 失対労働者は、生産部門労働者ではないが、民間日雇に出る者も一部含まれるのでIに分類した。

5) 生活保護世帯も同様、便宜的にIに分類したが、D層は全階層・全部門にまたがる底辺である。

スシートの次の質問事項のなかにどのように答えてもその人の履歴が分かるようにと考えて調査票を作りました。その結果をまとめたものが、後で出てきます。

苦労話ついでに言いますと、当時、調査票

を作るというのはとても大変でした。まだワープロやパソコンがありませんから、原稿を書いて配置を決め、作ってから印刷業者に渡すのです。静岡大学の出入りの業者に、それをもって室蘭に来てこういう調査をしたい

表4 (資料集表 1-13) 下請企業一覧と労働力構成 (1964.4)

(単位:人)

現在の配属	企業名	資本金 (万円)	新日鉄への依存率	労働力構成				現在の配属	企業名	資本金	新日鉄への依存率	労働力構成					
				計	男子	女子	年少者					計	男子	女子	年少者		
	合計			5,036	4,327	626	83										
	○第一鉄工	5,000	88	960	902	45	13		大平工業								
	○幌清建設	1,000	100	63	50	9	4		田川工業			61	50	11			
	○大平工業	180,000	70	454	409	45			○丸彦渡辺			15	13	2			
	小計			1,477	1,361	99	17		加藤工業	500		101	84	17			
	○産業振興	15,000	100	321	286	31	4		菅組工事	9,900	80	135	120	8	7		
	○古川工業	4,000	100	137	129	8			黒田勤熱	2,626	70	116	105	10	1		
	○浜野鋼業	480	100	177	128	47	2		南北海道ジーゼル	1,250	65	4	4				
	○豊謙工業		100	63	59	4			○大和工業	1,000	100	236	173	59	4		
	○産鋼商會			?	?	?	?		本								
	○製鉄化学			37	30	7			・								
	小計			735	632	97	6		建								
	○日本通運			110	105	4	1		北興工業	2,600		5	3	1	1		
	○栗林商會	7,000		137	127	10			戸田組			15	11	4	1		
	○陣上工業	2,500	100	222	156	66			泰和車輛	1,200	100	15	11	2	2		
	○橋本通運	2,000	65	471	400	65	6		山口建設			3	2	1			
	○鉄源	43,200	39	?	?	?	?		富士アルミ			11	7	3	1		
	○岩川商會	700	100	40	30	10			函館ドック			17	16	1			
	○大坪運輸	250	90	35	33	2			風田勤熱			?	?	?	?		
	○坂田組	200	100	8	8				富士工業			?	?	?	?		
	○富士開発			9	6	2	1		○日東土木		(100)	216	186	26	4		
	○北貨運輸	560	99	35	33	2			大平電業			12	9	3			
	小計			1,067	898	161	8		竹中工務店			19	15	4			
	大昌電気	2,800	57	19	17	2			神工業			221	195	26			
	○拓北電気	1,500	30	116	100	6	10		伊藤組			12	9	3			
	○北都電気	5,200	70	152	120	13	19		小計			1,320	1,117	188	20		
	山口電気機械	1,000	40	12	11	1			富士縫製			31	6	25			
	○東邦電気			26	23	3			英蓉			5	5				
	○山岸電気			?	?	?	?		富士グリル			13	1	10	2		
	小計			325	271	25	29		同潤社			23	23				
									山口食堂			40	18	21	1		
									小計			112	53	56	3		

資料：室蘭労働基準監督署調べ。
注：○印は今回調査対象となった企業。

と依頼しますよね。そうすると必ず、対象企業から調査するのはいいが、この項目は削ってくれどか、こういうのを聴いてもらっては困るとか言われて訂正しなければならない。そうするとまた印刷屋に持って行って、頼みなおさなければならないといったことで、とても時間がかかるのですね。お金もかかります。けれどもやらないと調査票は完成しませんから。時には作ったものを破棄するという、そういう苦勞もしました。

それから、だいたい中期頃、20年くらい前ですか、ようやくワープロ専用機が出てきて、うれしかったですね。これで自分ができるし、簡単に訂正もできるようになったので。最初のワープロ専用機で作りました、私は凝り性ですから線も引っ張って、昭和はSとか明治はMだとか。細かい字で入れて行って、でも途中までいったらメモリがいっぱいになり動かなくなりました。パアになってしまいました。それでメモ

リという言葉覚えて、何よりメモリが大きくなるとだめだと。

その後ようやくパソコンが出てきて、当時45万円の研究費を出しましてNECのVM2、いまから考えるとこれパソコン？というひどいものでした。初めは8インチのパソコンを使っていました。それから5インチになりまして、一太郎のソフトもたった1枚のフロッピディスクに入っていました。初めのころの一太郎もひどかったですね。最初の1行を訂正するとその後も全部ずれていくのです。それでも手書きよりは良いですから。それで今度はパソコンで調査票を作るようになりました。

調査票は小さくて枚数が多いと嫌がられますから、われわれの調査票はできるだけ大きくて見やすいような調査票をということで、いろいろありますが一番大きいのは、A3サイズの用紙で作りました。B4サイズで作って拡大コピーして、あるいは貼り合わせてA

3に調査票を作って見渡せるような形式にして、それも車で室蘭に運んだりということもやりました。そういう意味ではなかなか苦労しました。パソコンに早くから取り組んで覚えたのは調査のため、車の運転を覚えたのも調査のためでした。

5.2 自分の足で歩くことの重要性

それから、調査に入ることは事前に話していただいてあるのでいいですが、自分で感じたことは、やはり調査をするにあたっては、その対象のあらゆることに詳しくなければならぬといことです。現地の人以上に、われわれの場合ならば、室蘭の人以上に室蘭のことについては詳しく知っているという、それが非常に大切なことだと思います。

ただし、話の中で決してひけらかしてはいけません。何も知らないような顔で話をしておいて、その中で少しずつ質問をしたり問い返したりするのはいいです。あれはこうだったのではなどと言うと、「え？ そんなことまで知っているのですか」と。そうすると先方は段々と嬉しくなってくるのです。実はあれはこうだったのですよ、というように話してくれることが多かったですね。決して自分からしゃべりすぎてはいけません、これは私が得た大きな教訓ですね。聞き上手にならなければいけない、知っていても知っているように反応してはいけないということですね。そういうことに一番気をつけました。

私たちの調査は悉皆調査が中心ですが、ちょうどこのころ社会学会でSSM調査というのが流行ってきましてね、全国をわずか2,400のサンプリングで、日本全体の状況を代表できるという触れ込みでやっていたね。あれを見ると私などはびっくりしますけれどね。こんなことで本当に判るのだろうか。選挙の予想などのときは有効なのでしょうね。2,400票で日本全国の動向を把握できるというのは、

ただ、あれをやっている人を見てやはり疑問だったのはSSMの偉い先生方というのは自分で何にもやらないのです。全国の人にやらせてコンピュータにかけて、出てきたデータだけを手元に置いて、書いているのです。あれで本当の結果が判るのかというのは今でも疑問に思っています。

SSMに属している人はいないと思いますので言ってしまうのですが、いるのですか？ まあ仕方がないです。あのころは、要するにデータによせられた変化というのは全部「近代化」「都市化」で説明をしていましたね。近代化でこうなった、農民が減って都市の人口が増えて、これは近代化だとか都市化だとか。そんなことだったらあんな調査をしなくてもいいのではと思いましたがね。実際には偉い先生方は行っていませんからね。出てきたデータに自分の知識で書くと、農民層分解のあと農村から人がどんどん出てしまったあとのSSM調査を読むと気の毒になりますね。膨大なデータを前にどう説明したらよいか。苦労していることは私などから見るとありありと読みとれます。やはり私は、調査というのは自分の足で歩いて、そういう経験の上にデータを集めたり、加工したりするのが大事なのではないのかなと思っています。

私は静岡大学の教養部にいたものですから、ゼミの学生というのはいないのです。それで保育専門学院の学生、東京女子大学の学生たちと一緒にあちこちを歩きました。保育専門学院の学生というのは本当にたくましくてびっくりしました。最初のころはこんなのでいいのかなと思いましたがね。みんな、寺に宿泊するのです。寺の本堂に毛布を持ってきてごろごろと。自炊もしましたね。何を作れるのかというとライスカレーだけ、1週間毎日ライスカレーを食べていました。布施軍団もそういう経験があるかもしれませんが、そういう調子で調査をやったのですが、今思うと非常に懐かしいです。それと室蘭市には

「労働会館」というのもありまして、これも安価で宿泊できたので、東京女子大の学生は毎年労働会館に宿泊しながら調査をしていたのです。

みなさんご存知でしょうが、静岡大学は国立の全国機関ですので公文書というものがかなり有効でありました。公文書を出して市役所や官庁に行きますと、調査で分かったのですが、国が一番偉いのですね。次は県、その下が市町村で、上からの命令は絶対なのです。嫌らしいことなのですが、ですから必ず公文書出していくようにしました。特に最初のころは、公文書を出してくださいと先方から言われるのです。公文書で来て、その仕事だと「公務」になる。勝手に頼むとそれは「公務外」の仕事になりますからね。そうするとその人の勝手な負担になってしまうので、必ず公文書を出してというようにしました。

5.3 計算尺から電卓へ

それから集計では随分苦労しました。今日はこれしか用意してきませんでしたが、コーディングに力を入れてきたので、いろいろな調査にあわせたコーディング用紙を作りました。これは一番小さい方で、たいていはその2倍か3倍はあります。裏表があります。こういうコーディングに書き込んで、その過程で頭のなかで事例研究を積み重ねる。そういう方法でやりました。

とはいえ、やはりデータとして集計しなくてはならない。それが大変でした。初めのころは何もありませんから、ソロバンで足し算をしていて、それからパーセントを出すのが大変で、手でやるのが大変で、当時、理系の学生は計算尺、知っていますか？ 計算尺、こちらで割る数と割られる数を合わせると、答えがこちら側に出てくるのです。それを使って何パーセントとコンマの一桁はそれで正確に出ますね。そういうやり方でパーセン

トを出していました。

何とか機械でパーセントを出したいと思いつけていましたからそういう機械が出てきたらすぐ飛びつきましたが、なかなかいいものはありませんでした。タイガー計算機というのはハンドルをぐるぐる回すのですよね。機械があって、こう数字が出てきて、計算尺の形をちょっと変えたようなものですね。それから電卓が出てきて、でも初期の電卓はものすごく高価でした。一年分の研究費を出してもまだ足りなかった。

静岡大学に行った当時はまだ実験講座ではなかったもので、研究費も低かったです。それを全額出しても買えなかったです。電卓が、そこで、もう研究しなくなった定年間近の先生方に奉加帳というのを作って寄付を募る。これを研究しなくなった先生方、例えば心理学の先生は昔から実験講座だったので、お金が余って仕方が無いので何か使い道はないかということで、5万円だとか、当時は大金でしたがそういうのを貰って、ところがその電卓が何割の何でパーセントがすぐ出てこないのです。ものすごく幼稚な電卓でしたが、それを使ってやっていましたね。ですから今、電卓が100円で売っているのを見ると、昔は何十万もしたのにと涙が出ますね。そういう苦労をしながら調査をしていきました。

5.4 パンチカードからカードリーダーへ

その次に出てきたのがこのパンチカードです。新しい集計用具が出てくるとすぐ飛びつくんですけども、これは見ていただくと分かりますが何も書いてなくて申し訳ないのですけれども、実は真ん中にいろいろ項目を書くところがありますね。この欄に使い易いように自分で印刷して使っていました。そして手集計するときはこれにパンチ機で穴を開けていくのです。どういう意味かという穴が二つあって、1、2、4、7とありますね。これが組み合わせなのです。つまりこの線で

区切ってある1, 2, 4, 7が一項目なので、それで1と答えた人は1の上に穴を開けるのです。2なら2の上に穴を開ける。3は1と2を開けると3になる。

そういう組み合わせで穴を開けていくのです。そして、何本も細い棒がありまして、それをここに突っ込んで振るわけです。そして1の回答の人を選び出すときはそこに通すわけです。ところが1と3の人のときは何本か通して振るわけです。するとパタパタと落ちて、それをものすごい数やりました。そうしたら腱鞘炎になりましてね。パンチで手首、振るいで腕が痛くなりました。しかしよく考

えてみるとこうやって分類するのと同じなのですね。これだと一回に1しか出てきませんから。クロス集計をするときはこっちが1でこっちが3の場合とこれができるのですね。それぞれ棒を通して、曲芸的に両手でもって振るといふ。本当に腱鞘炎になってしばらくペンを持ってなくなりました。

それからさらに進歩して、外国文献社というのが「パスキー」という機械を発明しました。これはカードリーダーというのがありまして、読ませることができるようですね。黒く塗ってチェックしてある項目を集計していくわけです。その当時としては画期的なもので

資料1 コーディング用紙の一例（職業移動調査票）

職業移動調査票												
No.	受付	生年	MTS	年	月	男	女	身体状況	1	2		
3	学籍	訓練所	種目	期間	年	修了	年	免許	3	4		
6	家	続柄	年齢	職業	その他	9	事業所	10	地名	11	職種名	
12	族										就職	
14	状										退職	
16	況										12	
											13	
											14	
											15	
											16	
											17	
											18	
15	退職理由	解雇、応募、その他							14	退職直前の収入	円	19
												20
15	希望職業							16	経験、技能、知識等			21
												22
17	訓練施設							18	職種			23
												24
								19	期間			25
									入所年			26
												27
20	事業所名	21 地名		22 事業内容				23 創業 MTS		年		28
												29
24	従業員数	人		25 資本金		億・万円		26 労働組合		有・無		30
												31
30	休日	日曜・祝日・		27 週休2日制		完全・隔週・その他		28 就業時間		AM	PM	32
								① 時		分	時	分
32	賃金形態	月給・日給・日給月給・時間給・その他						② 時		分	時	分
								③ 時		分	時	分
33	賃金支払日	毎月 日・その他		34 賃金締切日		毎月 日・その他						33
												34
35	a 基本給	円		b 住宅手当	円	c 通勤手当	円	d 家族手当	円			35
												36
36	月額	円		円		円		円				37
												38
37	日額	円		円		円		円				39
												40
38	(a+b)	円		円		円		円				41
												42
40	昇給	年	円		年	円		年	円			43
												44
42	加入保険等	雇用・労災・健康・厚生・退職金共済・財形		43 退職金制度		有(最低)		年勤続		無		45
												46
44	定年制	有(歳)	無	住宅	單身者用	世帯者用	45 費用	毎月	円	円	47
												48

資料2 パスキー・カードの一例（老人世帯調査）

した。初めは何も書いて無いところに塗っていったのですが、何も無いところに書くというのは間違えるし、大変だったので、何とかここに調査項目を印刷できないものかと思って、印刷を試みたのです。

〔小内：それは独自に考えて？〕

そうです。要するに黒い鉛が入ったインクで印刷すると全部読んでしまう。ですから、印刷屋と結託しまして、何とか黒いインクを一切使わずに印刷できないか、と注文しましてなんとか作ってもらったものなのです。青ですとか、お手元にはっているのは茶色ですね。このようにして作ってもらおうと、マークが容易になりまして、これが一番大きいカードです。これにこうチェックしていきました。

これをカードリーダーで読ませて、これを集計するときには指示カードがありまして集計するところを、黒く塗りつぶして読ませるとそこだけ集計した数のがのんびりと出てくる。すごくうるさい音がするのですが、長い紙になって出てくるのです（周りの研究室で音がうるさいと文句が出て、部屋を端に移されたおかげで大きな調査室を貰いましたが）、こんな機械でも、本当に嬉しかったんです。なんせ調査票がものすごい数になりました。それで日本石油の労働者の集計をしました。

それから「グラフ作成機」というのもあります。グラフを作るときに横河電機という、私の高校の同級生で北大時代に成績が優秀な友人がいて、一番給料が高くて将来性のある会社といって入社したのが横河電機で、何を造っているのだろうと思ったら、データを入れるとグラフを描くのですね。それでも当時としては画期的だったのです。学会報告といういわれわれは宿でこんな大きな模造紙、ただの白い紙なのですが、それに線を引いて描いたものです。それを学会のときに黒板に貼るわけです。説明が終わったらまた次の模造紙を貼って、学会というみんなそのようなものを持ってきていたのです。横河電機のグ

ラフ作成機は本当に画期的でありました。そういう時期もありました。

5.5 統計ソフトの登場

その次に出てきたのはパソコンで、集計ができるというものでしたが、初めのころのパソコンのソフトというのはろくなものがありませんでしたね。パソコンを使うために関連のソフト会社から全部取り寄せて、アッサムだとかいろいろ調べたのですが、あまり良いのが無かったですね。それでも多少は利用しました。一番よさそうに思ったのがこの「秀吉」で、アンケート調査の集計で使いました。ところが初期のころの秀吉はひどくて、項目が100までしか入らないのです。No.101までいってしまうとNo.1のところのデータが勝手に変になってしまう。No.102を入れるとNo.2がというように、勝手に変化してしまう。学生が卒論を書いていて締め切りが迫ってきているのに、そのデータがみんなおかしくなってしまうと、お前のところのソフトはひどいと電話で文句を言ったら、最新版が出たのでそれなら大丈夫だと思うので、これから持って行くと言って、それを使ってやった覚えがあります。でもそれを貸してやろうというのです。普通なら欠陥商品なのだから取り替えるのが当たり前だと思うのですが、貸すので終わったら返して欲しいというのです。

最後にたどり着いたのがSPSSですね。SPSSが一番よかったと思います。もう一つありましたよね、SASですか。両方やる気力はもうありませんので、やはりSPSSでやりました。あれは非常に優れたものですが、SPSSの解説書はひどかったですね。あれはアメリカのマニュアルを直訳した解説書で、いくら読んでも何のことをいっているのか解らない。操作がわかってから読むと成るほどと解るのですがね。でも、これは随分使わせていただきました。

5.6 データの分析とビジュアル化

論文の発表もそういうデータを使ってできるようになりました。そして私が担当したのが表2-4【資料集】で例えば農民から室蘭にやってきてこういうようになっている人たちの移動ですね。「分解型」「流出型」に区別しています。分解型というのは農民が家族を分解して出てこなくてはならない。ですから農民の下層ですね。流出型というのは家族が壊れないでいて、そこから次男が出て行くかどうか、そのような形なのです。つまり上層が独占企業のいいところに入って、下層の農民は、分解型で低いところに就職する傾向が強いということを表そうとしたものです。

その次に、表の2-5【資料集】からはこういう形で各社会層ごとに、その社会層の形成過程をこれによって明らかにしようとしたものであります。上は項目、下は階層ですね。こういったものを取り上げたのかというと、親の職業。これも親の職業といってもいろいろありますから、実はたくさん聴いています。生まれたときとか、学校を卒業する頃の親の職業だとか。それから、初めて就いた職業はなんであったか。いろいろと変遷した場合に、

一番われわれの決めた社会層の一番上までいった最高職は何であったか。現在の職業の直前の職業はなんであったかということをお聞きしました。これを1945年、1950年、1955年、1960年と、5年刻みで。こういうようにしないと本当に階層移動、職業移動、それらが把握できないと思いました。こうやって見ると簡単ですが、5年ごとに集計するというのは本当に大変でした。でも、面白い形で見ることができたと思います。

途中は飛ばしますが、図5-2【資料集】の都市の自営業主の階級間移動を何とか目に見えるように表せないかということで、このような図を作りました。つまり量を線の太さで表しましたものであります。上が親の代で下が本人の代です。都市の自営業にたどり着くまでの親の職業と、本人の職業の変遷をみようとしたものであります。それで、都市自営業主の階級的な性格を捉えられないかということでやりました。面白いのは、あの当時は親が自営業の人が多いのですよね。そして子どもが大企業などに就職して一定期間は勤めて、それから親の後を継いで自営業になってくるといのも一つの傾向として分かりまし

表5(資料集表2-4) 階層別移動類型 — 生産部門 —

(単位：%，()内実数)

階層 \ 類型	計	農 民		漁 民		都市自営		職 人		そ の 他
		分解型	流出型	分解型	流出型	分解型	流出型	分解型	流出型	
合 計	100.0 (872)	10.6	30.5	5.7	5.0	3.7	4.4	2.2	3.6	34.4
A 独占企業工員	100.0 (397)	7.8	36.8	3.0	3.3	3.5	4.8	1.8	3.5	35.5
B 下請企業工員	100.0 (251)	12.7	25.9	5.2	6.0	5.2	3.6	1.6	5.2	34.3
C 臨時・日雇層計	100.0 (166)	15.7	20.5	13.9	6.6	1.8	4.8	2.4	1.2	33.1
下請臨時工	100.0 (46)	23.9	19.5	13.0	6.5	2.2	4.3	2.2		28.3
港湾荷役	100.0 (37)	2.7	16.2	16.2	2.4	5.4	5.4	5.4	5.4	37.8
建設人夫	100.0 (31)	12.9	9.7	9.7	3.2		9.7			54.8
出稼労働者	100.0 (52)	19.2	30.8	15.4	9.6		1.9	1.9		21.2
D 失対・生保層計	100.0 (58)	5.2	36.2	3.4	8.6	3.4	3.4	6.9	3.4	31.0
失対労働者	100.0 (34)	8.8	50.0	2.9	8.8	2.9	2.9	8.8	2.9	14.7
生活保護	100.0 (24)		16.7	4.1	8.3	4.1	4.1	4.1	4.1	54.2

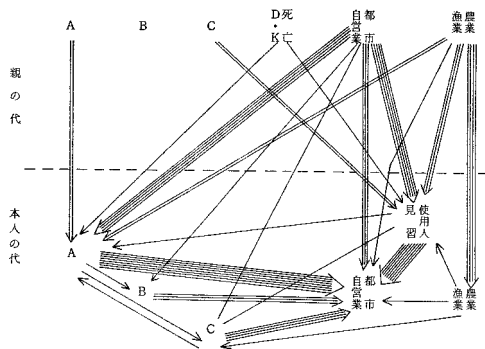


図4 (資料集図5-2) 都市自営業層の階級間移動

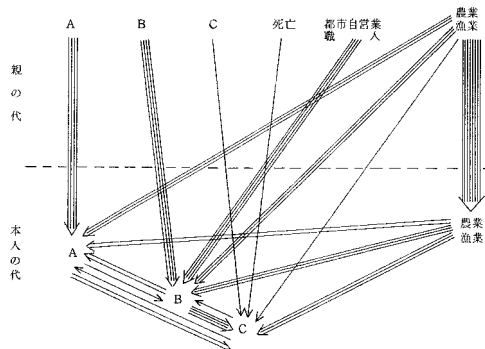


図5 (資料集図7-1) ブルーカラー労働者の階級・階層間移動

た。都市自営業が使用人見習いとしてどこかへ出て行って、それから自分で自営業を始める、そういうプロセスがこのようなビジュアル化をすることによって見てもらえるのではないかと思います。

最後ですが、労働者階級の移動ですね。そのビジュアル化です。図7-1【資料集】これがブルーカラー労働者の階級・階層間移動です。親の代でAというのが独占大企業、下が本人の代、先ほどの話でもありましたが、親の代でBの下請け企業やCの臨時日雇い、そういう層の子どもが大企業の工具になるということはないということはこのこれで解りますね。Aのほうはそのまま、親が中小企業のBに属している子どもはB階層になることが多い。それからこの時代は都市自営業と職人層からBの階層になる子どもが増えてきているということもわかると思います。それから、農業や漁業、まあ農業のほうが多いのですが、そこから上層は大企業、中から下は中小企業、さらに自分の子どもが自分で農業の跡を一度継いで、それから都市へ出てきた場合にはA, B, Cに分散しているということも、こういう図を使って表わせば分かるのではないかと思います。

6. 日鋼室蘭争議と階級意識

6.1 解雇と労働者の連帯

そういうわけで、ここからまた少し苦労話

を、先ほどの話しにも出しましたが、階級意識調査、室蘭で社会移動の調査をしているときに、日鋼に元いたという日雇い労働者に出会いました。日鋼争議はご承知と思いますが、戦後、会社の4人に1人の首を切るということになり、これが大変な争議になりました。当時としては組合員が自分たちの給料は半分に減らしても良いから、1人の首も切らなくてくれと、そういう要求を出しているのですね。今だと信じられないですよ。それが当時の第一組合の要求だったのです。こういうのを連帯意識というか階級意識というのか、いまの労働者にはないかもしれませんが。

ところが段々切り崩されていって第二組合ができて、第一組合と第二組合の熾烈な闘争ということになりました。では、どういう人が第二組合にいたのかということなのですが、第二組合の人に話を聴きました。実は私の親は小樽の港の港湾労働者なのです。当時は機械がありませんから、人力で船から荷物を降ろし倉庫へ運ぶのです。その会社の常用労働者だったのです。ですから、そういう人たちの意識というのはかなり分かっているつもりなのです。労働者の場合には結局、上に対する憧れというのがあるのです。

日鋼室蘭の場合には結構、東大出の若いエリート社員が赴任して来ます。そういう人たちが、問題意識というか向上心のある工具を集めて勉強会みたいなものを開くんですね。

表6 (資料集表2-5) 第1部門独占企業工員の社会移動

(単位: %, ()内実数)

階層・職種		時 点		親の職業	初 職	最 高 職	前 職	1945年	1950年	1955年	1960年
		1945年	1950年								
合 計		100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)	100.0 (397)
旧 中 間 層	旧 中 間 層 計	64.5	41.6			32.5	10.8	3.3	0.5	0.3	
	農 業	44.6	30.7			23.2	7.8	2.3	0.5	0.3	
	漁 業	6.3	4.3			3.3	1.5	0.8			
	都 市 自 営 業 人 職	8.3	2.8			2.7	0.5				
A 階 層	A 階 層 計	21.2	35.5	17.4	13.4	52.9	86.1	93.2	98.7		
	第 I 部門大企業ホワイトカラー 専 門 ・ 技 術 事 務	0.5					8				
	第 I 部門大企業ブルーカラー	15.6	29.7		5.0	49.9	83.9	93.0	98.2		
	第 II 部門大企業ホワイトカラー 事 務 販 売										
	第 II 部門大企業ブルーカラー	0.3	0.3		0.3						
	官 公 庁 ホ ワ イ ト カ ラ ー 専 門 ・ 技 術 事 務	1.8	0.3		0.5		0.3				
	官 公 庁 ブ ル ー カ ラ ー 労 務	3.0	5.3		7.6	3.1	2.1	0.3	0.5		
	自 衛 隊 ・ 警 察	3.0	4.0		5.6	2.3	1.8	0.3	0.3	0.3	
			1.3		1.8	0.8	0.3				
	B 階 層	B 階 層 計	8.6	10.8	17.4	18.9	6.3	2.5	2.5	0.5	
第 I 部門中小企業ホワイトカラー		0.5	0.3		0.8	0.5					
第 I 部門中小企業ブルーカラー		6.8	9.3		16.1	5.3	2.5	2.5	0.5		
工 員 ・ 人 夫 運 転		6.0	9.3		15.6	5.3	2.5	2.3	0.5		
第 II 部門中小企業ホワイトカラー 事 務 販 売		1.3	0.8		1.0	0.3					
第 II 部門中小企業ブルーカラー		0.3	0.3		0.5	0.3					
C 階 層	C 階 層 計	1.8	8.8	6.5	7.3	1.5	0.3	0.3			
	第 I 部 門 臨 時 雇 用 第 II 部 門 臨 時 雇 用	1.3	1.8		2.0	0.3					
D 階 層	D 階 層 計	0.5	7.1		5.3	1.0	0.3	0.3			
	失 対 労 務 ・ 生 保 業 失										
	不 該 当	3.3	3.3	3.0	3.3	2.3		0.3	0.5		
		0.8		55.7	24.7	26.4	7.8	3.3	0.5		

そういうところに喜んでくるような人たちがいるわけです。結構、マルクスの本などを読んでいたのです。不思議なことにね、当時の若いインテリというのは左ががっている人もいましたから、それで大企業に入って、左翼ぶってる人がいるんですね。そういうのについて勉強したりするのですよ。こういう人たちが憧れを持っている。その人たちが第二組合に行くことになる。そうやって、職員層を

中心として第二組合を作ることになったのです。

一方ではそれに対する反発も起きるわけですよ。連帯意識を持って会社側に反発する。そういう構図のなかで、195日というものすごい長い労働争議がありました。聴いたら、本当にスリルとサスペンスに満ちた物語ですね。第一と第二のいろいろな事件がありました。できれば読んでいただきたいのですが。

6.2 諸証言のパソコンによる編集

これもどうやって本にするかということも大事ですが、やはりパソコンがあったのできたんですね。聞き取り調査はテープに何本も吹き込んだのですが、吹き込んだはいけれどもこれをどうするかと、初めは自分で聞いてテープを起こしていたのですが、素人では全然駄目で速記屋に頼みました。速記の人というのはものすごく早いですから、それを一太郎の形式でおろしてくれたのです。そしてその一太郎のソフトで編集したわけです。そうすると、同じ証言がたくさん出てくるわけです。Aさんに聴いても、Bさんに聴いても、ただちょっとずつは違ってきますから、そういうものは一太郎を使って繋ぎ合わせていって、膨大なこの本を作ることができました。

その他、組合の総括だとか、ピラだとか、そのころはまだスキャナーがありません。OCRもなかったの、どうしようもないものは私がパソコンで打ち込んだんですね。御茶の水書房というのはそこまでやってくれませんか、全部ワープロに打ち込んでそれを本屋に持ち込んで、本屋はそれを起こして本にするだけです。しょうがないから後ろの方も全部私が打ちました。そこで得た成果がプラインドタッチで、端の方は駄目ですけどアルファベットの辺りはプラインドで打てるようになりました。それが成果ですね。

6.3 労働争議と階級意識の形成

そういう具合に日鋼争議の意識調査、つまり主体形成、階級意識の調査を行いました。労働者の人というのは、普段から階級意識を持っているわけではないのですよね。普段はもっと全然別なことを考えていますから、争議などの時に階級意識が出てくるのだなと思いました。そして、大変な時期になればなるほど鮮明に意識を強く持つようになるのだということが分かりました。しかも、そのとき

だけではなく、第一組合に残った人はずっと後まで第一組合にいるんですよ。その後、新入社員が入社すると労働協約でみんな第二組合に入れられてしまうのです。ですから第一組合は退職者が出るたびに組合員が毎年減っていくことになるのです。それでも彼らはすごいプライドを持って、誇り高く生きているのです。

若い新入社員から、インタビューをしたときに聴いたのですが、職場にどうもみんなと違う人がいる。胸を張って堂々としていて、立派な人がいると思ってどうしてだろうと聞いてみると、かつての第一組合の人だった。そういう人は人格も優れているのです、会社には言わないでください、ここだけの話ですが、と教えてくれたりしました。とうとう組合員も少なくなってしまうと、10年後に第一組合と第二組合が合同して一つになってしまったのです。まあ、第二に吸収されたような形です。というわけで私としては階級意識の研究ができたということで、大変面白い調査だったと思っています。

7. 布施グループの調査研究について

7.1 理論仮説の欠如

最後に、小内さんから布施グループの調査についてのコメントをと難題を突きつけられました。もう一回、夕張を読みました。前から感じていたことなのですが、第一にこの本は重いですね、持って歩くのに苦労します。何を言えばいいのか。布施先生というのは私の先輩ですから、調査のことも相談に行っていたし、大学院のときに最初に『社会学評論』に論文が載ったときも布施先生が編集委員でした。室蘭のことを読んでなんだかんだと批評をしていた人でもあります。

私たちの立場というのは室蘭にただ入って調査をしていたのではなく、二人で考え討論を重ねていたの、夏休みになって札幌にくると、子どもに「お母さんたちって合宿して

いるみたいだね」と言われたことがあります。討論ばかりやるからね。仮説を立ててそれを実証するためにどうしたらいいのか。仮説も二重構造をもとにした社会層の抽出をして、それを証明するためにどのような調査、何を指標にして聴いたらいいのかを練って練って考えた。

ですからわれわれの調査というのは社会層、しかも、ただそれがあるわけではなく日本社会の中核部分ですね。だからわれわれの意識では、室蘭をやったというのは室蘭の研究というよりは日本社会の構造の研究であったのです。そのミニチュアという中核としての室蘭という位置づけでやっていたのです。日本社会の全体を調査することはできませんから、まさにそれを縮小した形、しかもその本質部分がある都市として室蘭を選んでいるわけです。われわれが室蘭で証明した仮説は、日本全体に当てはまると自負しているわけですね。そこが重要なことではあるのです。

布施さんの夕張の本が私たちの室蘭の本の一年前に出ましたので、形の上からは我々の研究の方が後に思われるかも知れません。小内さんをご存知だと思いますが、実は布施さんたちが夕張に入る10年以上も前から研究をやっているわけです。そして、あちこちに論文で発表してきたものです。コメントを、と言われたときに言わざるを得ないのは、われわれが先行して同じような研究をしているのに、どうして布施さんたちは、これを引用しないのか。これは他の研究者に聞かれるのですが、私もなぜかなと思っていたのです。小内さんに聞いたほうがいいかも知れませんが、

我々の立場からいうと布施グループの夕張の調査は理論仮説がないということですね。われわれのような社会層を確定して、その実証研究という、鮮明な仮説がないのではということですね。確かに読み返してみてもマ

ルクスの理論を基本にして、当時流行っていた片手にマルクス、片手にウェーバー、これが非常に格好よかったわけですね。しかも恩師の鈴木栄太郎をふまえてと三者を統合した調査ということが序章に書いてましたんでね、偉いことを考えているなと思いました。

結局、調査対象の選定ということになると、われわれのように悪戦苦闘をして仮説を立てたのではなく、夕張というところの調査対象を次のように選定するとして、あっさりと三層の「直轄」と「職員層」と「組夫」があって、それから炭鉱の跡地に入ってきた企業の労働者層、私はそういうのを「層」と呼んでいいのかどうかと思いますが、そのような分類なのです。それから都市自営業者層、失対労働者層、生活保護受給層ということなのですが、やはり階級、階層というからにはそれなりの理論的な内部の関係について、それがないと階級・階層と言えるのかどうか。ちょっときついかも知れませんが、われわれのやってきたことからみればそういう思いがあります。本当はわれわれのやってきた室蘭を引用し批判して、それを超えるものとして、こういうやり方をするのだということを出してほしかったけれども、それがどこを読んでも見当たらない。それがちょっと残念だと思っています。

7.2 変革主体形成の理論化

布施さんはその本を出す前から、我々によく言っていたのは、室蘭研究には「変革主体の形成がない」とよく言っていました。ですから多分、意識の中ではその変革主体の形成というものを目指して夕張調査をされたのかなと推測しています。ただ、変革主体がどういときに形成されるのかという問題については、理論化は一切されていないように思います。ものすごく細かく生産・労働—生活史誌を追いかけてはいますけれども、それがイコール、変革主体の形成に結びついているよ

うには思えないということです。

だから、終章に布施さんは書いていますが、第一の成果は炭鉱労働者、およびその地域の人々の生活を「記録」として残すことができた。第二に理論化しなければならないのだけれど、それはここではやらないと書いてあるのです。また別の機会にもっといろいろ考えてからでないと理論化できないと。

そのようなわけで読み返してみても、失礼かもしれませんがわれわれから見ると物足りない。われわれは階級意識というのは、日鋼室蘭争議の中で見られたような形で、普段から持っているのではなくて、争議のときにこそ鮮明になったり強くなって出てくるものではないかと考えているということです。

7.3 抽象化を通じて本質へ

細かいことを言ってもあまり意味がないと思いますけれども、私たちのやった研究というのは、やはり社会学の中ではちょっと特殊な位置にあるのかも知れません。というのはわれわれに対する批判で一番多いのは「全部を扱っていない」ということなのです。室蘭のあるいは非常に特殊な都市の調査研究だということなのですね。だから、あれもない、これもないという形の批判が多いのです。

よく考えてみると社会学というのは確かにSSMで代表されるように、対象となるもの全てを取り上げて、そこからサンプリングしていきますよね。そして全体というものの傾向などを把握しようとしていますよね。考えてみたら社会学というのはそうだったのではないかと思いますね。社会学的方法として、「分類」して「比較」という方法がありますね。そう言われるとそうなのかなと長い間思ってきました。

でも、われわれは階級・階層論ですから、マルクスの理論というのは、まさに全部を対象としているのではなく、量的には少なくとも資本家、労働者という二つの階級、これこ

そが社会の軸であり中心であるという、そういう認識ですよ。他の人たちはいっぱいいても、まさにその中核を捉えることが社会の理解であると思いますね。

これは、昔から言われている論争ですね。マルクスの言う奴隷制の社会などについては、反論として当時のギリシャ、ローマには、奴隷でも奴隷所有者でもない人がいっぱいいたんだと。いっぱいいたのだから量的にも奴隷よりも奴隷でない人は多かったのだから、奴隷所有制の社会というのはおかしいという考えでありました。そういうのが「社会学的発想」なのかなと思いました。資本主義社会の、まさに基軸になる資本家と労働者、それ以外の人がいっぱいいるわけですから、まさに資本家と労働者こそがその社会の中核をなす軸で、その関係を見ることが、この社会の構造そして変動、行き着く先そういうものを捉えられるという認識。そういう抽象が重要であって、全部を対象にしてはその社会の本質は捉えられないのではないかと、私たちは考えてきました。

7.4 夕張調査とSSMの共通点

山田盛太郎もまさに地主と資本家と労働者、小作と労働者が両方高率の小作料と低賃金というひどい搾取を受けている。両方貧しいけれども、貧しい小作の師弟が女工とか男子工員となって家計を補充している。だから家計が何とかもっていたし、そういう低賃金構造が、高い資本の蓄積を可能にしていたのだという発想ですね。それは、まさに素晴らしいとは思っただけけれども、社会学者は思わないことなのかなと。小作といっても農民の半分弱くらいですからね。それ以外は自作農なので、他の人がいるのに、それだけを取り出して典型的なものとして社会の基本的な構造だとかいうのはおかしいと言うのは、やはり社会学的发想ですね。ずっとそういう対立があるのではないかと思います。

でもウェーバーもやはり同じなのではないかと思えますね。ウェーバーも、結局は彼の「理解社会学」というのは、私の理解するところでは、人間の行為を四つの理念型にまとめて、伝統的、情緒的、価値合理的、目的合理的、そういう行為をとる人が支配と服従の関係を生み出していった。伝統的支配と最後は官僚制の支配ですね。そういうのを抽出したというのはまさに、社会全体を取り上げるといよりはその中の核を抽出して、中核、それを抜き出してきて、それで官僚制も社会に息づいているという。そういう発想ですね。やはり、そういうものが大切なのではと思えます。

私を感じることはそれを全部ひっくり返してというものよりも、SSMというのはいずれから日本の社会学の歴史のなかでも、とても大きな意味を持っていると思います。SSMはまさに全体を対象として、それを表すようなサンプリングですね。日本全体を表している。だから日本はこうなっていると。だから常に全体を対象にしていないと把握したこと

にならないという、そういう傾向ですね。

私は、それは逆だと思っています。常に全体ばかりを同じレベルで見ているのは、本質はつかめないと思っています。そういう点で見ると布施先生のあれはどちらなのか。多分、後者になるのではないかと。つまりこの三層はグループのような感じなのですね。なぜ三層なのかではなくて、あるではないかと失対労働者が出てきましたと、ただ出して、その生活史誌をここに載せたと、そういう感じなのでは。本人がもうお亡くなりになっているのに、きついことを言って申しわけありませんが、率直に感想を述べさせていただくとそういうことです。

注

資料集：重化学工業都市実態調査 資料集

参考文献

- 共著『社会諸階層と現代家族—重化学工業都市における労働者階級の状態Ⅰ』御茶の水書房
共著『日鋼室蘭争議 30 年後の証言—状態Ⅱ』同